

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

516  
335

始



24. 9. 17

73



麻  
女  
學の創生期

生  
義  
著

至  
上  
社  
出  
版

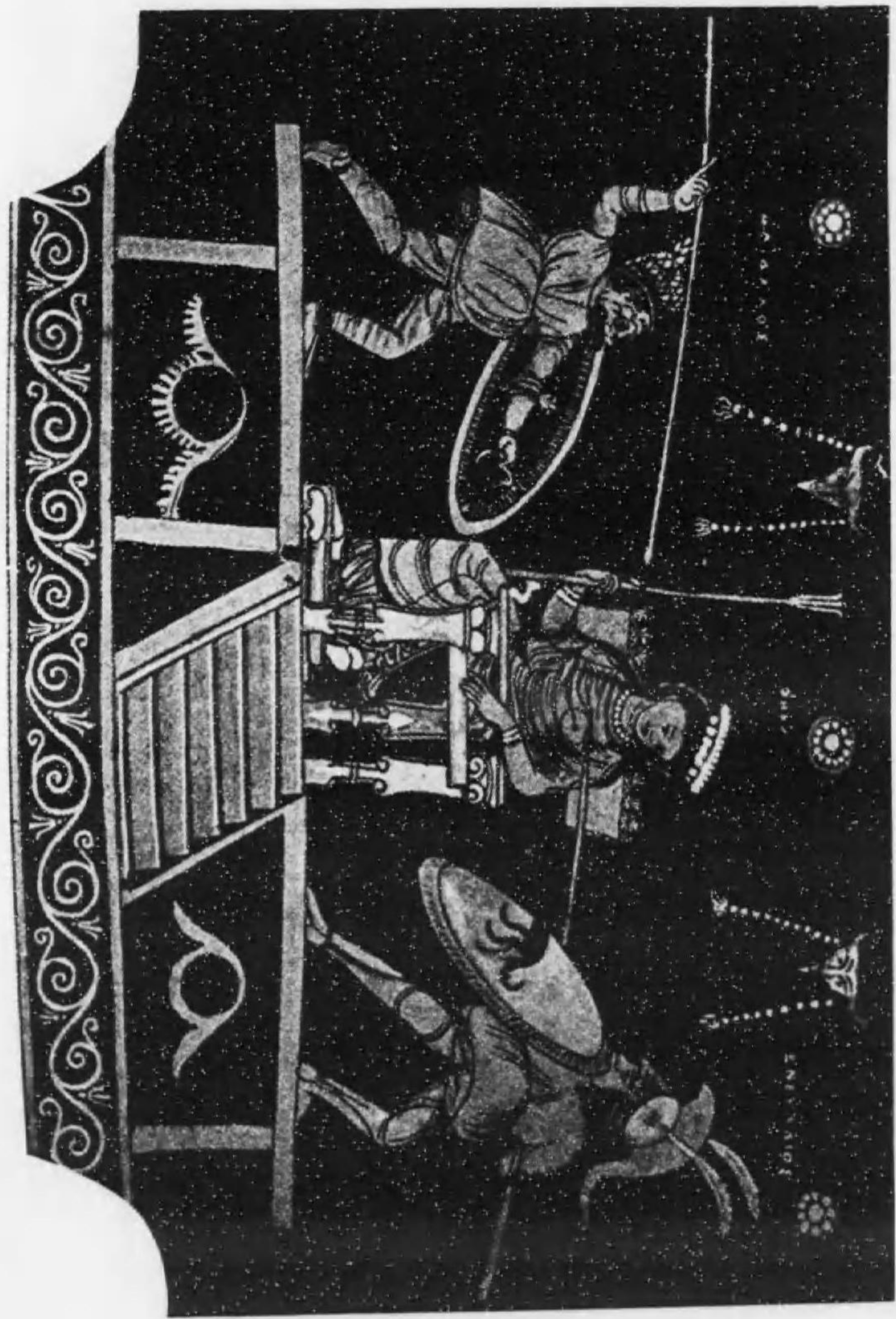
大 正

14. 8. 1

内 交

希臘劇の演出法を調べる材料は古蹟に残つてゐる  
繪を見ることが第一の近道である。

ここに示されてゐる繪はアレスとエラエトスの  
戦争を畫いてゐるもので、その扮装は各々の性格  
を非常に誇張してゐるので、誇張悲劇と言ふ  
題を附けられてゐる。中央の希臘語はヘラ、左上  
はダイダロス(エラエトスの事)右上はエニユ  
アロス(アレス)と讀まれる。



アトロス (アラス) と艶をびる。

トアトアロス (エレニスイヌの事) 本士トエニエ  
 思ふ柄むらびてゐる。中央の番舞番はくち、本士  
 ぶ非常に精進してゐるのう、精進 悲 嘆と言ふ  
 舞律を盡してゐるものう、その伴奏は各々の拍鼓  
 一一に示らびてゐる番はアラスとくレニスイヌの  
 舞を見ることは第一の要諦である。

番舞陣の寛出者が臨める林林は古殿に敷してゐる

516-335

さういふ氣なら行きなさい。それに泉が家からさほど遠く離れてゐないから、私も夜が明けたらすぐ牡牛の群を野に追つて行かう。そして畑に種を蒔かう。何時も口でばかり神々の名を唱へてゐる怠けた悪者が、當り前の労働もしないで、その日の糧を得られはしないからな。

—エレクトラ—

## 序言

西洋の文學や藝術をよく理解するためには、どうしても希臘にまで遡らねばならない。二三千年以前に、あれほどの文化がかの土地に榮えてゐたことは、誠に驚嘆に價するものである。それ以上に西洋文化の背景に流れてゐる希臘思想の勢力を知ることは、さらに大きな驚異であらう。「文學の創生期」は、一般の文學に關して、大略その起源を討ね、主として希臘文學の變遷について記述したものである。紙數の制限があつたために、詳説したい箇所を簡約にした點などはあるけれども、希臘文學の輪廓と、それから問題とはかなり廣く觸れてゐる積りで

ある。参考した書物に就いては、エディンバラ大學に希臘語を講義してゐるチルヤ  
アド氏の「希臘文學史」の名前だけを上げて置かう。同書は、今著者の企でてゐる  
目的と、同じ目的の下に著はされた小冊子であつて、然かも内容のよく纏つた書  
物であるから、説明の順序などは同書の例に倣つた點の多いことを、特に斷つて  
おきたい。

それから今一つ斷つておかねばならないことは、希臘固有名詞の發音である。

希臘語その物の研究が英佛獨の諸國に於て、それ／＼その固有の國語に影響され  
てゐるやうに、固有名詞の發音も各國區々であるために、何れに據るべきか一考  
を要するけれども、そうかと言つて希臘の原音を寫す時には、更に耳遠い感じが  
するので、この書物では便宜上英語の流儀に依ることを目標にしてゐる。然し判  
り易いものだけは、原音に依つたものもない譯ではない。

著者の不敏のために、或は大いなる誤謬をなしてゐるかも知れないが、それ等

は偏に江湖の是正を俟つ次第である。

千九百二十五年六月五日

市外高圓寺 去來庵に於て

著 者 識



# 目次

口給(希臘劇の演出)

序言.....▼

## 發生篇

第一章 文學の起源.....一

第二章 希臘劇.....一四

## 希臘篇

文學の創生期

第一章	ホメロスとその叙事詩	二四
第二章	抒情詩の時代	三七
第三章	希臘悲劇	四五
第四章	喜劇	七一
第五章	散文の發達	八二
第六章	哲學とその文藝上の意味	九三
第七章	アテネの雄辯術	一〇三
第八章	希臘頽廢期と羅馬思想	一一〇
書誌		一二三

# 文學の創生期

## 發 生 篇

### 第一章 文學の起源

文學を發生せしめる動機としては、それ／＼の立場から、様々な意見が立てられるであらうけれども、主観的な見方即ち美意識の創作活動といふ問題をしばらく別問題として、これを社會學的方面から見れば、一人の人間とこの人間の對象となつてゐる人又は自然の關係の、色いろな組合せによつて文學は發生したと言ふことが出来る。プラトンが言つたやうに哲學の起源が自然や人生に對する疑怖に原因してゐるならば、文學も一つの起源を自然の魔術に對する愕きに持つてゐ

たと言はれるであらう。日月星辰の運行から、四季の循環にいたるまで、原始人の知識ではどうしても解釋のつかない恐るべき自然の現象に取り圍まれてゐた。言ひ換ゆれば原因の不明な——例へば魔術のやうな事實の前に、彼等は愕きの眼を見張つて、先づ神を念ずることを知つたのである。神と人との間に祭りと言ふ一つの形式（表現）が現れた時に、そこに文學は最早一つの勢力となつてゐた。自然に對する愕きの印象を、祭神と言ふ具體的な形式によつて言葉として現した時に、文學の最も原始的な姿は見出されるのである。即ち神（對象）と神を祭る者（主體）との組合せが、ここに出來て、それが感情の表現となつて文學發生の動機をなしたのである。

文學又は藝術の起源を、祭神にありとする説明は恐らく誰もが知つてゐる月並な意見にすぎない。然し祭神（Rite or Ritual）から、どう言ふ經過をとつて藝術になるかと言ふ問題は、稍々複雑な心理問題になるので、次の希臘劇の場合に讓

つて、ここでは唯、神とこれを祭る人との間から文學は萌芽したと言ふだけに止めておかう。その種類によくあてはまる詩の名を上げるならば、サツホの「アフオロダイトに寄する歌」の如きはさうである。我國の祝詞のりごとの如きもこの好い例であるし、それをもう少し具體化した天皇尊崇すめらみことの歌の如きもこの部類に屬する。その思想は「安治やすみしし、わが大君の、聞し治をす、天の下に、國はしも……」となり神を具體的な人物の上に顯現して、「大君は神にしませば……」となつて、萬葉集などにその痕迹を止めてゐる。

その對象が神でなくて、人であつた場合には、そこに二通りの組合せが出来る譯である。同性であつた時には、原始時代の例としては、多く争鬭（戦争）となつて現れ、異性であつた時には戀愛となつて、ともに文學の起源に重要な動機を與へてゐる。スパルタの抒情詩は、行軍の樂から起つたものである。兵士の士氣を鼓舞するためには、語句の短い勇壯な歌を必要としたものであらう。古事記を

見ると次のやうな文學の原始的な姿のままの然かも優れた詩が残つてゐる。「稜威々々し、久米の子等が、粟生には、臭韭一莖、其根が莖、其根芽つなきて、撃ちてしまむ。」又「稜威々々し、久米の子等が、垣下に、植ゑし蜀椒、口疼く、我は忘れじ、撃ちてしまむ。」又「神風の、伊勢の海の、大石に、延ひ廻ふ、蜘蛛の、い延ひ廻り、撃ちてしまむ。」などの歌は、歩調に合わせて大聲に歌ひながら行軍したものに相異なる。歩行と言ふことは非常に音樂的なものである。韻律の最も原始的な短長格 (Iambus) はギリシヤ語の歩行に關係のある言葉であり、韻律 (Meter) そのものも、足をもつて一歩々々量ると言ふ意味から出てゐる。この歩行に他の要素を加へて、藝術的に進歩させたものは即ち舞踏である。ギリシヤは舞踏に於ても優れた國であつた。散文作家クセノフオンの書いたものに次のやうな文句が見える。「エニア人及びマグネシヤ人は甲冑の身構へして立ち、カルペアンダンスといふを舞へり。一人あり、武器を側に置いて牛の鞭をあ

やつり、折ふし、恐るる者のごとくふり返る。盗人あり、この時近寄る。さきの人、これを見て武器をつかんで追ひ、牛の鞭をかざして戦ふ。吹奏の拍子に合せて、人は皆かく舞へり。」又同じ作家の書いたものに「まづアリアドネ新婦のごとき装をして出で來り、席を占む、やがて靜々とディオニソスあらはれ出で、樂に合せて舞ふ。見るものは皆若人の身ぶりをたたへ、アリアドネは座にも居たへず、光景にいたくも感じたり。しばらくしてディオニソス、アリアドネを見、戀に燃えて女の膝にかがみ伏し、まづ抱きてやさしく接吻す。舞の手に女もまた同じ思ひにディオニソスをかき抱く。」と、ある。近世の舞踏は英國のダンカン女史が、希臘の瓶や彫刻繪に残つてゐる踊りを研究した結果、新しく復活されたものである。

戀愛を出發點として、その文學上に與へる感激に就いては、今更冗長に説明をすることを要せないであらう。萬葉の相聞や、古今の戀歌の中に、如何に多くの絶

唱を含んでゐるであらう。中世ドイツのミネザングや、ギリシャの抒情詩に、異性の美しさが如何に讚美されてゐるであらう。若い人の間には「妹が手を、取りて引きよぢ、うち手折り、君がさすべき、花咲けるかも。」（萬葉九）となり、「白き腕、沫雪の、若やる胸を、緩たたき、たたき拱がり、眞玉手、玉手差しまき、股長に、寝はなさむを……」（古事記）となるが、一たび生別の悲しみに會ふと、その戀心はさらにつつて、「わが妻は、いたく戀うらし、呑む水に、影さへ見え、世に忘れず。」（防人）「吾が妻も、晝に描きとらむ、暇もが、旅行くわれは、見つつ俛ばむ。」（防人）死別の悲しみは、わけて愛着の念を強めるものである。「吾妹子が、植ゑし梅の木見るごとに、心むせつつ、涙しながる。」

かかる戀愛が、文學の起源となつたことは明であるが、我國に於ては、歌謡會などの風習があつて、特に興味のある材料を提供してゐる。異性の間の相互の注意力は、頗る微細に働いて、そこに面白いテーマを歌つたものが生れてゐる。

單に巧者の満足にすぎないかも知れないが、一例を上げて見よう。

「久方の、天の香山……弱細の、手張腕を、枕かむとは、吾はすれど、眞寢むとは、吾は思へど、汝が着せる、襲の裾に、月立ちにけり」（小碓命）これに答へて「新玉の、月は來經ゆく、諾なく、君待ちがてに、吾が着せる、襲の裾に、月立たなむよ。」（美夜受比賣）これは古事記中巻に見えてゐるものであるが、東西古今の文學を通じて、女の潮紅（Meibloss）を題材にした文學では、恐らくこれなどが傑作であらうかと思ふ。

文學の起源となる人間の働を、自分と自分のため、と言ふ自利的な方面に向けたものは勞働である。勞働は本能的であると主張する人があるかも知れないが、一元的説明の便利上、ここでは自分のための自分の活動といふことにしておきたい。その原始的な歌は催馬樂などにも見うけられるけれども、土佐日記の船頭の歌のごときは、最も優れた、そしてその間の事情を表はしてゐるものであると思

ふ。「春の野にてぞ、音をば泣く、わが薄にて、手を切るく摘んだる菜を、親や食ららん、姑や食ふらん。かへらや昨夜の菜を、虚言をして、賒りわざをして、錢も持て來ず、已れだに來ず。」

原始人の間には労働の歡喜といふことがよく知られてゐた。希臘に残つてゐる古瓶の繪などにも、その様がよく描かれてある。例へばクレテ島から發掘された石罎石の壺に描かれてゐる收穫祭の行列（レオンハルトの「希臘文化史」マールテンの「ヘラス」などにその繪が複寫されてゐる。）の如きは、明らかに労働と文學との關係を示してゐる。その行列に加つた人の口から、その繪が示してゐるやうに最初の原始的な詩が歌ひ出されたものである。

労働の特殊な場合が狩獵と言ふ形式で表はされる。希臘の古甕にダリウス狩獵の圖などがよく書かれてゐる。その狩獵に行く人や、これを送る人の間に、「御執の、梓の弓の、音すなり、朝獵に今立たすらし、夕獵に、今立たすらし、御執の、

梓の弓の、鳴弭の、音すなり。」（萬葉卷一）と歌はれるであらう。獲物の多かつた時には、「宇陀の高城に、鳴繩張る、わが待つや、鳴はさやらず、いすくはし、鯨障る。」と歌はれ、その勇ましい姿を「健夫の、男さびすと、劍太刀、腰にとりはき、獵弓を、手握り持ちて、赤駒に、倭文鞍うちおき、はいのりて、遊び歩きし、世の中や……」と讀へられて、そこに文學、特に抒情詩の起源が認められる。

労働や神事の祝祭には酒がなくてはならないものであつた。酒と文學との關係は、ニイチエがその「悲劇の發生」の中に、文學をアポロ的とディオニソス的の二つに分てける點でも知られる。希臘のディオニソスは酒神ではなくて本來は耕作の神であつたが、我國の酒が米から出来るやうに、希臘の酒は葡萄から出来るので、何時とはなしに耕作の神と酒の神とが同じものであると、考へられるやうになつた。これにはディオニソスの祭が、ちようど春の葡萄酒の醱酵するころであつた、と言ふことも、有力な原因となつたであらう。文學が酒に起源をもつ

てゐることは、「この御酒を、醸みけむ人は、その鼓、白に立てて、歌ひつつ、醸みけれかも、舞ひつつ、醸みけれかも、この御酒の、御酒の妙に、轉樂しささ。」と言ふ歌の文句によつて知ることが出来る。

萬葉集卷三に見えてゐる大宰師大伴卿讚酒歌十三首は、李白や杜甫の詩とともに讚酒の文學として、世界文學中將に第一等に屬する傑作の一つである。それはボオドレエルなどのデカダン詩人や、ワイルドなどの耽美派の酒の歌と比較して決して遜色のない作品である。

益なき、物を思はずは、一杯の、濁れる酒を、飲むべかるらし。

酒の名を、聖と負せし、古への、大聖の、言の宜しさ。

古への、七の賢き、人達も欲せし物は、酒にしあるらし。

賢しと、物言ふよりは、酒飲みて、酔ひ泣きするし、勝りたるらし。

言はむ術、爲む術知らに、極まりて、尊き物は、酒にしあるらし。

中々に、人と有らずは、酒壺に、なりてしがも、酒に染みなむ。

あな醜、賢らをすと、酒飲まぬ、人を能く見ば、猿にかも似む。

價なき、寶と言ふとも一杯の、濁れる酒に、豈勝らめや。

夜光る、玉と言ふとも、酒飲みて、心を遣るに、豈如かめやも。

世の中の、遊びの道に、樂しきは、酔ひ泣きするに、あるべかるらし。

現世にし、樂しくあらば、來世には、蟲に鳥にも、我は生りなむ。

生ける物、竟には死る物にあればこのなる間は、樂しく有らな。

黙をりて、賢するは、酒飲みて、酔ひ泣きするに、尙ほ如かすけり。

その發生期に於ける文學は、すべて音樂と關係が深かつた、そしてその最も原始的な形式は抒情詩 (Lyric) であつた。抒情詩と言ふ言葉は、堅琴 (Lyra) と言ふラテン語から來てゐる。戦争とか労働とかに出るとき、足拍子手拍子に合せて

歌つたものであり、まだ歌壇會に出た若い男女が、それぞれ美しい聲を張り上げて異性を呼ぶために歌はれたものが、文學の最も原始的なものとして考へられてゐる、叙事詩はその語源をギリシヤ語のエボスまで遡らねばならない。エボスは物語りの意味である。時としては物語の中の一語々々をエボスと言ふこともある。それによつてわかる通り、時の経過を経た後に回顧的に人の前で歌はれたものが叙事詩である。平家琵琶とか大平記讀みとかがあつた如くホメロスのイリアッド、オデイツセイはその原形に於ては、語り物であつた。吟遊詩人が町の四辻に立つて、さてもトロイの戦の始まりは、人の心の忿よりぞ起りたりける……と節を付けて堅琴に合せて詠つたものゝ斷片が、後の詩人の手によつて集成されたものに外ならない。萬葉に残つてゐる水の江の浦島子の歌や、田邊福麻呂や山部赤人によつて歌はれた勝鹿の眞間の手兒名の歌は、叙事詩の原始的なものであらう。散文が文學の中に位置を占めるやうになつたのは更に後の事であ

る。今日見らるゝやうな短篇小説は、浪漫主義以前には嘗て知られてゐない所であつた。それ等の起源は本書に於ては全く問題にならない。

然しさきに我々は重要な問題を一つ取り残して來た。即ち神と神を祭る者との間に生れた文學のことである。それは如何なる國の原始時代にも、文學發生の動機として、最も大きな役割を演じてゐる。我々はそれを希臘劇と言ふ最も偉大模範的な例によつて、考へて見ることにしやう。



## 第二章 希臘劇

劇の起源が、現代の意味に於ては劇と何等の交渉のない祭式にありとすることは説明なしでは、餘りに唐突のやうである。然しディオニソスの春の大祝祭とアテネ人との關係を調べて見ると、これが何等の不思議もなく受け入れられると思ふ。今日アクロポリスの南側に残つてゐるディオニソス劇場は、春と冬の祝祭の時だけ開場せられた。そして所謂ディオニシアの五六日の間は早朝から劇が演ぜられた。希臘劇は四曲一組の競演であつて、エミツヘンの研究によると一曲の上演に凡そ二時間半を要したさうであるから、全部では餘程の時間を要することゝな

るがこの長い間アテネ人は俗界から離れた神域（フレシククト）（彼等の言葉に従へばテメノスである。）の中にあつて、宗教的の法悦と、藝術の雰圍氣とにひたりフレザア氏の所謂同感的魔力を感じてゐた。

劇場の中央には祭壇（アルタ）があつた。それを取り圍んで、普通に五十人から成る合唱團の位置すべき圓形のオオケストラがある。舞臺（ステジ）は半圓形の座席と對立してゐるスケネ（衣裳部屋）を背景にした場所に設けられてゐる。（これには異説もある。）

劇場は凡ての希臘市民のために開放せられた。然し普通の市民は座席の前列を占領することを遠慮するのが禮儀となつてゐた。前列の座席だけは、後に寄掛り（バック）をもつてをり、前列のうちでも特に中央の席は肱掛座（アムチエ）になつてゐた。この席は國の役人によつて占められた。その役人は凡て祭司であつた。前列の中央にはディオニソスの祭司が坐り、その近くにアポロの祭司とか、オリンピヤのゼウスの祭

司などが席を占めた。婦人の席は最も上の列だけであつた。凡ての入場料は不要である。劇場の費用は祭式から上がる賽銭によつて償はれてゐた。その賽銭がどの位の高に上つたかはよく判らないけれども、デモステネスの「オリツスの演説」から知られる所によれば、一戦争の戦費にあてる事が出来る位の高に上つたことは確かである。

希臘語の祭式といふ言葉は、事をなした、とか仕終つたと言ふ意味をもつてゐるドロメノンである。このドロメノンが劇ドラマと言ふ言葉に變化してゐる所に、劇の起源を研究するに有力な手掛りがある。希臘人には祭りをせよと言ふことは、何事かをなせよと言ふことであつた。則ち何事かを感じるだけでなくして、それを行爲に表現せよ、と言ふことであつた。これを心理的に言へば、衝動を受けるだけではならない、衝動に對してそれを再現しなければならぬ、と言ふことであつた。則ち舞臺的表現——劇ドラマと言ふ言葉は、物をなしたと言ふ意味をもつ

てゐるところのドロメノンから變化して、既に神のために我々は何事かの行爲をしたと言ふことを意味し、それが宗教の世界から藝術的世界には入りこんで、祭式とは漸次離れて來た別の領域を形造るやうになつた。

言葉の上ではこのやうに説明することが出来るが、實際の経過として祭式から劇に轉ずるまでには多くの曲折を経てゐる。祭式から劇に轉ずる最初の形式として表はれるものは、農業の收穫の多いことを祈る場合や、戦争の勝利を祈願する場合に、原始人の間によく見られる身振劇ペントマイムである。太秦ウツクシの廣隆寺で行はれる壬生みぎ狂言もこの類に屬するであらう。身振劇と言ふ言葉の意味の中には既に今日の劇と言ふ要素が入つてゐる。即ちパントマイムのマイム(Mime)は希臘語のミメシスから來てゐる。ミメシスは普通に「模倣」と譯せられてゐるけれども、語源的には模倣といふ意味ではなく、マイムと呼ばれた人物の行爲を意味してゐる。

「ヤイムと言ふのは原始的な踊りに於て、扮装をした人のことを指してゐる。既に扮装をすると言ふことは、それが單なる祭りではなくて、既に他のある目的があつて、扮装をしたことを考へるに難くない。祭りの形式が感情の表現であり、多人數の集團的行爲となつた際には、その表現を誇張して、人々を共同感情の中に引き入れやうとすることは、近代人が花見に行く際に、何等かの扮装をこらしめて行く例のあることによつて知られる如くである。即ち單なる主觀の衝動が、群集と接して誇張した形式をとることとなる。——こゝに原始的な藝術は最も早くもその芽をふいてゐた。

この身振劇が一定の季節と關係をもつてゐるやうになつたのは、それが農業と深い關係をもつてゐたことによつて、むしろ當然の結果であると思はれる。祭式から藝術へ移る第二步は、季節と交渉してゐるところの季節踊り (Seasonal Dance) の中に見出さるべきである。これは近代生活の中にもその例をもつてゐる。例へ

ば草深い田舎に今も尙保存されてゐる孟蘭盆會踊とか、或は田植頃に行はれる田植踊りとかにその原形の意味をもつてゐるまゝのものを見ることが出来る。

エスキロスやソフォクレス、エウリピデスの悲劇は、ディオニソスの祝祭の時にアテネに於て演ぜられた。これは主として四月の初めに行はれたのである。これによつても知らるゝ通りに、ずつと後までもこの祭式は季節と關係をもつてゐた。この季節踊りから劇の起つて來たことを、アリストテレスはその「詩學」の中に書き残してゐる。

「悲劇は——また喜劇と同じく——最初は單なる即興にすぎなかつた。——前者 (悲劇) はドイツランボスの指導者に關係して起つたものである。」この一節によつて、劇の起源をよりよく知るためには、ドイツランボスの説明を必要とする。ドイツランボス (Dithyramb) は、アリストテレスの時代には既に文學的形式をとるやうになつてゐたけれども、その原始的の形は春の祭である。

アリストテレスが、悲劇はデイツランボスから出てゐることを我々に告げる時、我々は殆んど直覺的に祭式の最も簡單なる形から出發した藝術のことを、以上に述べた諸理由と綜合して、理解することが出来る。彼は歴史的根據をもつて祭式と劇との密接なる關係を論ずる我々の理論に材料を提供してくれらる。デイツランボスは韻のない華やかな祭の踊りであるけれど、希臘人自身が早くからその原始的の意味を忘れてしまつてゐた。然し彼等は傳統的に何時それが踊らるべきのであるかを知つてゐた。ピンダルはアテネのデイオニソスの祭のために、デイツランボスを書いた。その歌は春の喜と、百華の禮讚で一杯になつてゐる。その意味が祭式から藝術に移つて來たのは、歴史的に明らかかな變遷を示してゐる。既にプラトンの時代にも、デイツランボスは新生を喜ぶ歌と踊りになつて、デイオニソスの春祭りとして深く結びつけられてゐた。それは去年の秋に稔つた葡萄が、翌年の春の祭り頃には立派に醱酵して、盪惑的な匂ひを立てゝゐたので、春に還つ

た喜びと、この酒の喜びと、二重の意味によつて希臘人の憧憬となつてゐたに違ひない。プラトンは歌の種類について論じてゐる。「或物は神に對する祈禱である——これ等は讚歌と稱せられる。これと全く反對の種類は挽歌と言はるべきであらう。他の種類にボエアンがある。今一つのデイオニソスの生誕を喜ぶ歌は私はデイツランボスと言はれる歌であると思ふ。」プラトンは既にデイツランボスを合唱歌の特殊な形式であると思つてゐた。彼はその本質に於てデイツランボスはその起源を祭りにもつてゐる春の歌であると言ふ事實を知つてゐたか、どうか大きな問題である。プラトン以後の希臘詩はプラトンの用法に従つて、若し詩人が、デイオニソスの生誕のことについて書いた場合に、それはデイツランボスと言ふ題を附けられる例になつてゐた。

デイツランボスその物の語源については、古來謬れる、語源學者によつて、二重の戸をもてる人、と言ふ意味であるとされてゐたけれども、今日の言語學によ

れば、それが神聖なる耕作者とか舞踊者または生命を興へる人の意味であるとしてゐる。この言葉の語源と、その變遷と、更にその指導者のなしたる事（ドロメノン）から劇（ドラマ）に移つて來た歴史が、農事に關係した祭りから、希臘劇の生れ出た經過を明らかに語つてゐる。

ディオニソスの言葉としての意味は「神聖なる若者」であると現代の語源學は教へる。

「若さ」と「新しさ」との禮讚は、如何なる時代の人も持つてゐた共通の信仰である。「河の上の、五百つ磐群いはむらに、草生くさひさす、常にもがもな、常處女とこをらにて。」（十市皇とせいちみ子參赴於伊勢神宮時、見波多横山巖、吹黃刀自作歌、）や「變若水」（Elixir）の思想は、人類の發生した翌日から既に存在してゐる。新しきものへの憧憬のため、古い歴史の廢墟から生命を發見することを、我々はアンチノミーであると解釋する。古きものを知つて、これを克アウフヘーベン服することが、眞に新しきものを創造

する所以である。

## 希臘篇

## 第一章 ホメロスとその叙事詩

アツシリヤやバビロンの古代文化に續いて、ギリシヤ民族によつて起された特殊な一つの文化は、歐州の思想と文藝に強い潛勢力となつて、今日に及んでゐる。紀元前六七百年の頃から同じく紀元前四五世紀にかけて、何故ギリシヤに偉大な文明の華が咲いたか、と言ふ理由については、古くから色いろな學者によつて種々な説が立てられてゐるけれども、之を簡単に言へば、季節の變化が極めて順調であり、然も天恵に富んでゐたと言ふやうな自然的の理由と、全國が幾んど温

帯にあつて山岳は起伏し、その間に無數の小國が並立してゐて互に競争してゐたと言ふやうな地理上の理由と、それから今一つは言語が流暢であるとか、思索力や生活能力の優秀な人種であつたとか言はれてゐるやうな人類學的の理由が主なるものであると思はれる。然しもう一つの重要な理由は奴隸の使用である。ギリシヤの上流社會は一般に奴隸を使用して、世の俗事からは思ふまゝに遠ざかつてゐた。このためにギリシヤ人は専心その志す所に向つて全力を集中することが出来た。——これがギリシヤ文化の隆盛に向つた一般的の理由であるが、個々の時代に就いては、また個々の理由があつてその隆盛を形作つたのである。それはこれから述べる八章の内容によつて明になるであらう。

ギリシヤ文藝史——また恐らくは世界文藝史上に最初に出て来る人はホメロスである。この人のことを英國人はホオマア (Homer) と言ひドイツ人はホメル

(Homer) 佛蘭西人はオメエル (Homer) と夫々の國語によつて、異つた風に呼んでゐるけれども原語の發音によればホメロスでなければならぬ。

ホメロスの事について正確な事は何も知れてゐない、と言つて差支へない。懷疑の歩をもう一步進めるならば、ホメロスと言ふ一個の實在的な人間がゐたかどうか？と言ふことまで怪しくなつて了ふ。古來彼の故郷であると推察せらるゝ場所は七箇所ある。スルミナ、キオス、コロフォン、サラミス、イオス、アルゴス、アテネであるが、イオスの代りにロオドスやピオスであると言ふ人もゐるし、サラミスの代りにイタカであると主張する學者もゐて、定説として認めらるゝ程有力なものは今迄の見あたらないやうである。またギリシヤの文獻にホメロスと言ふ名が出てゐても、その人物が果して我々の問題にしてゐるホメロスであるか、或は他にホメロスと言ふ人がゐたか？と言ふ研究の出来るまでは、名が同じであると言ふ一つの理由から直ちに、ホメロスを一人のホメロスであると斷定することは出来ない。

ことは出来ない。

然しずつと古代からホメロスの作品であると言はれてゐる二つの重要な叙事詩がある。即ち「イリアッド」と「オディッセイ」である。「イリアッド」も「オディッセイ」も既に數種の邦譯が出てゐるので、その内容に就いては別に梗概を述べる必要もあるまいが、話の順序として一言するならば、「イリアッド」は、トロイ戦争と、それに關係のあつた挿話を書いた二十四冊の叢書から成り立つてゐるものである。そして二十四冊の各篇は <sup>アルファベツ</sup> A B とギリシヤ字母の順序によつて呼ばれてゐる。トロイの王、プリアムの子なるパリスはメネラウスの妻であつたスパルタの美人ヘレンを奪ひ取つた。この不都合な行爲に對して、怒り心頭に發したメネラウスはその兄弟にあたるアルゴスの王アガメムノンに向つて救助を求めた。これがこの物語の發端となつて、アルゴスは、ギリシヤの各地より大軍を驅り集め平家物語の文句をそのままに用ふれば宛も當麻竹葦のごとくトロイ城に攻め寄せ

たのである。これから戦争は殆んど十年間も続いた。トロイは封鎖され、その國土や都市は軍兵の足下に蹂躪された。この間に、アガ멤ノンとその第一の勇者アヒレスとの内訌や、ヘクトルと言ふやうな戰士の華々しい活躍があつた末に、アヒレスの従者バトロクルスがヘクトルのために慘殺された。これを見て大いに怒つたアヒレスはヘフェステスと言ふ名工の手になる甲冑に身を緊め、バトロクルスの仇思ひ知れ！と、叫びながらヘクトルに突撃した。トロイ軍にその人ありと知られたヘクトルと、ギリシヤ第一の勇者アヒレスとの、人も交へぬ一騎打を敵も味方も息を殺して眺めてゐたが、アヒレスの力が優つてゐたと見えて、ヘクトルはアヒレスの一撃を受け損じ、その場に墜と仆れてしまつた。アヒレスはその死骸を、敵と味方の環視の中に悠然として、トロイ城壁の周圍を引づりまはつた。然し最後に年老いたパリスの望によつてヘクトルの死骸をこの老人に渡し、「イリアツド」の一篇はヘクトルの葬儀をもつて終つてゐる。

この物語の筋は第一第九第十五第十六の四巻に盡されてゐて、他の部分はこれまでの神話に現れてゐた小さな物語の挿話を集成したものにすぎない。その間に佳人勇士の物語や、切々たる愛の囁きなどを點綴して、近世の文學に於てもそれに必適する作品を、發見するに苦しむほどの渾然たる大藝術品を形作つてゐる。「イリアツド」に就いても亦種々な疑問が提出される。古代文藝の批評家たちの間には、この作品を一人の手で成つたものではない、と言ふことに意見が一致してゐる。その理由としては、筋が一貫した關係を持ってゐないばかりでなく、一節の文章と他の節の文章との間の言葉に相異があるし、歴史的または考古學的に考察しても、その間に或一人の手で成つたものではない、と斷定するに足るやうな多くの矛盾を含んでゐる。「イリアツド」は我國の平家物語のやうに、豎琴の調子に合はせて歌はれた歌詞であつた。こゝに著者の想像を逞しうする事を許されるならば、中世のフランス南部（プロバンス）にゐたトラバドウルと稱



せらるゝ一團の詩人のやうに町から町へ、村から村へと遍歴して廻つた數人の歌人の口吟くしんみに歌はれてゐた歌詞が、何時とはなしに「イリアツド」の一篇を形作つたものである。

ホメロスに關する疑問は既に古代に於て、議論に上つたのであるが、千七百九十五年ウオルフの論文「プロロゴメナ」が出て以來、問題の中心はこの叙事詩の成立と言ふことに移つてゐた。その後千八百八十一年以來ドイツの考古學者シュライマン博士が、トロイの發掘を試みたことによつて更に新しい材料が提供されるやうになつた。その結果次の説が「イリアツド」の成立に關する眞に近い説となつてゐる。即ち「イリアツド」の時代にはアカイヤ人は尙ギリシヤ本土に住んでゐて、小アジア地方は全く野蠻であつた。アカイヤの大首領であるアガムノンアガムノンは南ギリシヤに於ける青銅文化時代の中心地アルゴスの平原を支配してゐた。これに對抗したアヒレスは北方テッサリヤの英雄であつたがために、この兩者の間に

争鬭の起るのは當然の結果であつた。その時代はミケネ文化以前、或はまたドリヤ人侵入以前の民族移轉の頃であると推定せられ、然もアガムノンは比較的文化の進んだ人民の首領であつたらしい。その後民族の移轉によつてアカイヤ人はヘレスポントヘレスポント（ダアダネルス海峡）を渡つて小アジアの地方に移住したために、このトロイ物語は小アジアの吟遊詩人によつて歌ひ傳へられることになつた。これ等の論から推して「イリアツド」は架空の物語ではなくて、歴史的事實に立脚してゐることが明である。

この物語は最初ギリシヤの植民地エオリア人の間にあつて、名も無き詩人の口に歌はれてゐたであらう。その後ホメリデと呼ばれる一派の首領ホメロスによつて大集成されたと見ることが比較的穩健である。現存の「イリアツド」はイオニア（小アジア）の俗語で書かれてゐるけれども語源的にはエオリアの俗語にまで遡ることの出来るのは、前述の如き理由から來てゐるものである。

「オデイツセイ」も亦二十四冊から成り立つてゐる。トロイで戦つた西ギリシヤの「島嶼イタカの王オデイツセウスは、その歸途太陽神と水神ポセイドンの怒を享けて、古代人の考へてゐた不思議な領域に於て様々な辛苦を経た末に漸くイタカの島に歸り着いた。王の不在中イタカの島は幼君の力足らず、貞淑な王妃ペネロオプの難澁や、奸臣の跋扈した状態を如實に描いてゐる。一篇の内容は既に我國の批評家も指摘してゐる通り、百合若傳説とよく似てゐるのは一種の暗合と言ふべきである。成立の年代から見れば「オデイツセイ」は「イリアッド」の最後の巻と同じ頃に出来たものと思はれる。

ホメロスの詩はギリシヤ神話の集成であつた。オリンピアの嶺に住む神と、世間の人間との間に結ばれた様々な交渉を面白く描き出してゐる。神と人とを枕詞のやうな形容詞によつて呼んでゐるのも、少なからぬ興味がある。ヘラは常に「牡牛の眼をもてる」と言はれ、アテナは「灰色の眼のアテナ」と稱せられる。その

他「雲たかるゼウス」「武者の楯アガムムノン」「足ばやのアヒレス」など、我國の飛鳥朝または藤原の宮の貴人たちが呼んだやうな風雅な言葉を、幾つとなく見出すことが出来る。ホメロスの詩はこのやうに詞の美しいだけでなく、想像力の美しさに於ても無比の稱を持つてゐる。後世、特に文藝復興以來の詩人たちが、ホメロスの詩に感激されたことは此處に説明するまでもなく周知の事實である。後世だけでなくギリシヤの紀元前五世紀の頃この詩は學校に於ける唯一の教材として、青年學徒の暗誦したものであり、別に我國の平家琵琶のやうに、「ホメロス讀み」と言はれる専門的な吟誦家もあつた程である。歴史的事實に就いて言へば、紀元前五百九十四年にアテネの執政官となつたソロンは、「ホメロスの詩を一般に暗誦せしめよ」と言ふ法律を出したと傳へられてゐる。又僭王ピシストラトスも同じやうな法律を出してゐる。この事實から見ても、ホメロスの詩の文藝史上に占むる地位を知ることが出来るであらう。

紀元前六世紀の終りに現存する形の作品となつた。この註譯で最も古いものはアレキサンドリヤの批評家アリスタルクス等によつて、紀元前百六十年頃に書かれたものである。

この時代の叙事詩で、断片の傳はつてゐるものに「テバイス」と言ふのがあつた。後世の悲劇詩人に大きな影響を與へてゐるために文藝史家の注意する作品である。

ヘシオツド——歴史的曖昧の中に住んでゐたギリシヤ人も、決して大平と幸福とをのみ享樂することを許されなかつた。戦車の響もあつたのである。肉親の争鬭もあり、階級の抗争もあつた。紀元前八世紀の頃、ギリシヤ農民の運命は現代の小作農と同じやうに、エンゲルスの言葉を用ふれば、屢々犬にも劣つた生活

を強ひられてゐたのである。貴族は土地の大部分を占有し、農民に對して壓迫の限りを盡した。後世の人によつて理想化され美化されてゐるギリシヤ文明の背景にも、かうした火の出るやうな階級の争が、夜となく晝となく繰り返されてゐた。ヘシオツドの兄ペルセスの作「田園日録」は、この社會的事實を如實に描いたものである。ヘシオツドは農民詩人である。農民の貧窮を歌つた哀切な調は萬葉集に見える山上憶良卿の「貧窮問答」に彷彿たるものがあるけれども、彼は憶良と違つて自己の體驗を歌つた所に深い強味を持つてゐる。また彼の作「神統譜」は我國の古事記の如く、神の發生や生長に就いて書いてある。この作がギリシヤ神話の統一に大きな貢獻をなしたことは説明を要せない。別に彼の作と稱せらるゝ作品に「エオイア」や「ヘラクレスの楯」などの断片があるけれども、彼の作であるか、どうか疑はしい點を多分に持つてゐる。現存する彼の詩はイオニヤとエテリヤの俗語が混合してゐるが、イオニヤ俗語の混入は比較的後のことであらうと

思はれる。少なくともイオニヤ地方に於て吟誦されるやうになつてから後のことである。

## 第二章 抒情詩の時代

我々は今や傳説時代から歴史時代に移つて來た。紀元前八世紀以來、ギリシヤ人は小アジアの沿岸や、エ、ゲ海の島々に定住して、その植民地をイタリア、シ、リヤ、黒海地方に立てた。ギリシヤ人は太古から一定の國家組織の下に集つたことのない國民である。小國に分立して、各々その獨立の體面を保つことに努力してゐたが、僅に神殿保護同盟と、オリンピヤの競技（その第一回の競技は紀元前七百七十六年）とが、諸國に連合の機會を與へた。小アジアの沿岸にあるスミルナ、エフエッス、ミレトスの三都市は紀元前七世紀に起つて、六世紀にはその隆盛

の極に達した。その政治の變化から見れば、初めは王政モナキイであつたが、時代の變化とともに寡頭政治オリガムキイとなり、その結果僭王の起る虞れがあつたりしたために完全な民主政治デモクラシイを実施するやうになつた。イオニヤの天才達は科學的であり、方法的である。彼等の詩は思索的であり、諷示的である。

ギリシヤの各國が漸く隆盛に起いた頃、北方にペルシヤの勃興があつた。ペルシヤは漸次勢力を西方に伸張して、その先鋒はギリシヤと衝突するやうになつた。各々個々の國を立ててゐたギリシヤ人は、自分の民族に吹き寄せる暴風のために眼を覺して、一つの愛國心の下に集るの餘儀なきに到つた。

この時代に出來た抒情詩の大部分は、後の作家によつて引用された僅かな斷片が存するだけである。然しそれ等は大打情詩人達の手腕を立派に示してくれる。

レスビヤの島に生れたサツホは世界の生んだ最初にして、また最大の女流詩人であつた。アディングトン・シモンズの言葉によれば、「世界の凡ての詩人のうち

で、また文學に表れた凡ての優れた技巧家のうちで、サツホこそはその言葉に著るきしと、奇くしき完成と、貴あでなる優雅とをもてる唯一人の詩人である。」彼女の詩は彼女の周圍に集つてくる若き娘たちに對する美しい愛によつて感激を受けた。彼女の最も長い詩は「アフロダイトに寄する歌」であるが、心に湧く純情をそのままに歌つた文藝史上の絶唱である。また後のラテン作家によく模倣された自然に寄する感情や、想像力の美しさなどは、サツホを知る上に見逃してはならない。サツホの友達であつたレスビヤの騎士アルカユウスは愛と酒と歌の戦士であつた。この二人の創設したと言はれてゐる「アルカユウスとサツホの韻律法」は、ホレエスや其の他のラテン作家によつて自由に模倣されてゐる。

サツホは「レスビヤの愛」と言ふ名によつて知られてゐる。同性愛のために海に投じた純情の詩人のこの物語は、後世の人に強い感激を與へた。愛の對象は異なるけれど、勝鹿の眞間の手兒名や、菟原うはらの乙女或は櫻兒、蔓兒の戀のやうに、後の

人が「聞きつぐ人も、語りつぐがね」と物の本にあるやうに、同情の涙を流したのである。近代の作家によつて作られたサツホの物語はドイツの大戯曲家グリルバルチエルの「ザツプホ」と佛のドオデエの「サツホ」を上げることが出来る。

この時代の詩人として有名な人の中に、パロスのアルキロクスと言ふ複雑な性格をもつた短長格アンピシラクの創始者に擬せられる人がゐる。コロフオンのクセノファネスはホメロスの宗教を批評し、民間の信仰を罵倒した宗教改革者として、哲學史上に位置を占める人であるが、彼も亦吟遊詩人であつた。エレア學派の祖と言はれてゐる。彼の言葉で代表的なものを一二上げるならば、「人は神を以て自分のごとき感情形體を備へてゐると考へる。然し馬や牛が神を考へたならば馬や牛の如きものを考へるであらう。」又「エチオピヤ人は黒色白眼の神を思ひ、トラキヤ人は紅毛碧眼の神を思ふ。」

メガラのテオグニスや、アテネのソロン、アモルゴスのセモニデスなどは同じ

この時代の代表的な詩人である。セモニデスの女を諷刺した詩は、エフエソスのヒボナツクスと同様にミンギニスチツク女嫌ひの結果から出来た詩である。ヒボナツクスの詩の一節に、

妻は何時夫の喜となるか？

たつた二度ある——

結婚した時と、妻の死んだとき！

イオニヤの戀愛詩人ミムネルムスやアナクレオンも亦後世に影響した重要な詩人である。

ドリヤ人の作り出した歌では、スパルタ人が戦争に出かける時に歌つた軍歌が有名である。その作者としてテルパンデルやチルタユウスを上げることが出来るが、ドリヤ人の生活を描いたアルクマンが最も有名である。

アリオンは七世紀の後半にレスビヤに生れた詩人であるが、主としてコリント

の僭王ベリアンデルの宮廷で暮した。この詩人の功績はギリシヤ劇の先驅をなしてゐるドイツランボスを始めたことである。ドイツランボスと言ふのは既に説明したやうにディオニソスを讃へて踊る原始的な舞踊である。この派の詩人にステシコルスを加へることが出来る。

この時代に屬する最大なる詩人の一人はケオスのシモニデスである。彼によつてギリシヤの詩は地方的な又對話的な領域を起えて、國家的な性質をもつやうになつた。これは然し彼一人の特質ではなくて、彼斯戦争と言ふ時代の空氣が生んだ當然の結果であつた。これより以前小アジアの沿岸は彼斯軍の蹂躪する所となり、一時榮えたミレトスの町もその支配に立たねばならなくなつた。紀元前五百年にミレトスは彼斯に反旗を翻した。これが動機となつてペルシヤの王クセルクセスはミレトスの市を焼き拂ひ（B・C四九四）ギリシヤの本國を占領しやうとする野心を起して、この後屢々兵火が交へられた。紀元前四百八十年クセルクセス

の大軍は二手に分れて海陸からギリシヤに迫つた。この時スパルタの王レオニダスはギリシヤ連合軍の將として、ペルシヤの陸軍をテルモピレの險に擁した。パルシヤ十萬の兵は七千のギリシヤ軍に支へられて、一步も進むことが出来なかつた時に、味方に一人の裏切者が表れ、敵軍を間道から導き入れたのでレオニダスは前後に敵を受け、最後に三百のスパルタ兵とともに、テルモピレの露と消えた。その後サラミスの海戦で惨敗したペルシヤ軍は旗を卷いてその本國に引き上げてしまつた。然しテルモピレの一戦に戦没したレオニダスの勇名は、ギリシヤ人の肺肝に深い印象を刻み神殿保護同盟の命令によつて、彼の墓の上に石製の獅子像を建て、更に紀念の文句を刻んだ一基の塔をも立てることになつた。その短詩を作つた人はシモニデスその人である。

旅人よ、スパルタに行きて告げよ、

我等は國の法則（カキテ）に従ひてこゝに横はれることを。

この短詩ユビグラムをシルレルはその作「散步」スバルタルガングと言ふ詩の中に翻譯してゐる。かくしてスバルタ人の勇武と、ギリシヤの詩美と一致して千古の下までも騷客の胸に感激を與へる。

この時の今一人の大詩人はピンダル(B・C五二二—四四二)である。彼はテエベの近くに生れ田舎詩人の下に詩を學び、後アテネに出た。彼も亦放浪の詩人であつた。ピンダルの敵手にバクウリデスと言ふ人がゐる。この人については千八百九十七年までその名が知られてゐるのみであつたが、偶然の機會からエジプトの寫本が発見された事によつて、その眞の價値を知ることが出来るやうになつた。この二人の詩人はサラミス海戦の歌を作つたミレトスのチモチユス(B・C四四七—三五七)等とともに、精しく研究せらるべき詩人である。

紀元前五世紀の中頃が、抒情詩の終りであつた。これに代つて起つた悲劇によつてギリシヤ文化はその頂上に達したのである。

### 第三章 希臘悲劇

第一に注意しなければならぬことは悲劇と言ふ言葉の意味である。近代的の用法に従へば悲劇と言ふのは、その結末が主人公の死とか或は副主人公の死とか言ふやうな事件によつて組み立てられてゐる戯曲の稱呼であらなければならない。ギリシヤ語の悲劇は必ずしも結末がこんな破綻でなくても好いやうである。悲劇(トラゴデイヤ)と言ふ言葉の成り立ちを調べて見ればトラゴン(山羊)とオオデ(歌)の二語が合成した言葉である。その起源が原始的なドイツランボス舞踊にあることは既に一言した通りである。このドイツランボスに出る主役の人がデイオニッ



スの召使であるサチユルに扮して、山羊の服装をしてゐたがために、トラゴディアと言ふ言葉が生れるやうになつた。従つてその内容は宗教的な意味を持つてゐなければならぬ。宗教的に眞面な題材を取り扱つたものが悲劇である。

歴史的に見ればアリオンやバクリデスのドイツランボスがその先驅をなしてゐる。紀元前六世紀の頃テスピスが合唱團コオラスの代表者に答へる俳優を導き入れた。その文句は主として短長格の韻を踏んだものである。俳優はスケネと言ふ小屋の中で衣服を着換へたのであるが、このスケネ(Skene)と言ふ言葉が英語シインやドイツ語のステエネ佛語のセンに變化して幕中の場の意味となつてゐる。

紀元前五百三十五年にピストラトスの命によつてアテネに於て第一回の悲劇の競演があつた。この競演では如何なる詩人もアルコン(Archon)（執政官）に對して悲劇を捧げることが出来たと言はれてゐる。この時代の作は何物も残つてゐないが神話に題材を仰いだものであることだけは確かである。

フリニクス(B.C. 511—476)は多分テミストクレスの愛國心に影響されて歴史的事實を題材にしやうと企てた。彼の戯曲「ミレトスの掠奪」はアテネ市民の涙を擻ほらせたと言ふことである。

エスキロス(B.C. 499—456?)はギリシヤ三大悲劇作家と稱せらるゝ最初の人である。彼はペルシヤ戦争にも従事し、普通に九十篇の戯曲を書いたと言はれてゐるが、現存するものは僅かに七篇にすぎない。彼は普通三篇一組からなる三部曲トリキイと、これに附屬するサチユル劇とを書いてゐる。これが一般ギリシヤ悲劇の形式となつたものであるが、この原形のまゝ今日まで残つてゐるものは更に少ない。彼の戯曲は合唱團の性質を失つて、漸次戯曲的になつたことを示してゐる。彼の初期の作品(サツプリシスの如き)は半分以上も合唱團から成り立つてゐるがために、補助役を要しないが「プロメトイス」のやうな作品になると第三の補助役を要するまでに進化してゐる。然しギリシヤ劇はこれ以上の俳優を使

ふことは許されてゐない。即ち三人以上の俳優を使はれないのである。それで一曲の中に四五人の人物が出る場合には、この三人の俳優を配合して演ぜさせねばならない規則であつた。その演出法は室町時代以後の能樂によく似て歌劇的な要素の多いものであつた。それでもし能樂の發達について見て、シテのみが原形であつて、その次にワキが出て来るやうになり、最後にシテヅレ、又はワキヅレと言ふ順序をとつたと假定したならば、その發達は正しくギリシヤ劇の發展と同じことになる。支那の古代（元以後）に一時隆盛であつた元曲は、どんな演出法であつたかよく判らないけれども、その戯曲だけを讀んで見ると、やはりギリシヤ劇などのやうに象徴的な、また歌劇的な要素の豊富なものであつたらしく思ふ。

エスキロスは正しい悲劇の衣裳を始め、また踵の高い靴バスケンやいろ／＼な假面を作つたと言はれてゐる。舞臺装置は我國の能樂のやうに甚だ簡單なものであつて、俳優達は多分半圓形の合奏團オケストラを背景に用ひた。彼等の背後には三つの入口を

持つてゐる舞臺があつた。

舞臺には宮殿か、または寺院を表はした掛物が掛けられてゐた。舞臺の全面が變化すると言ふことは非常に稀であつた。然しその方法が全く無い譯ではなく、エクレマ(Ecclyema)と言ふ事が工風されてゐて、舞臺でもまたは俳優でも、その廻轉卓によつて舞臺面の後に廻轉することが出来るやうになつてゐた。俳優はまた上の窓に表れたり、神に扮した者は起重機によつて宙にぶら下ることや、高い所に登ることが出来るやうになつてゐた。然しこれ等の道具立は多分エスキロスより以後の事であらう。演出の古雅と、觀衆の想像力とは、凡ての優れた象徴的藝術に會つた場合、不自然と言ふ事實が何等の矛盾をも慙へることが出来ないやうに、ギリシヤ劇と完全に融合してゐた。合奏團よりも一段高く設備された舞臺は、多分紀元前三四世紀の頃まで知られてゐなかつたであらう——と言ふことは、原始ギリシヤ劇を研究する上に忘れてはならない力點である。

エスキ罗斯は深い宗教的な思想家であつた。そして彼の悲劇は人間の心の上に力強く迫つて来る大きな問題で満ちてゐる。傳説や實際上に表れる運命の力や神の非道や、無知の禍などを取り扱つた彼の特色ある戯曲のうちで「ペルシヤ人」は、時事問題を取材とした珍しい作品である。今までのギリシヤ悲劇は時事問題に觸れることは殆んど絶無であると言つてよいが、たゞ僅かな例外の一篇として「ペルシヤ人」を上げることが出来る。ギリシヤの本土に迫つたペルシヤ王クセルセスの敗北を織り込んだこの戯曲は、當時の愛國心に懇へたことは想像に餘りある。考證によれば「ペルシヤ人」は四百七十二年の作であるから四百八十年のサラミス海戦を去る八年、プラテエエの戦を去る漸く七年に過ぎないので、近松が一二ヶ月前の心中を直ちに題材にしたのと比べては年日の隔りがあるけれども、尙新しい時事問題と稱せらるべきである。人類に火を與へたと言はれてゐるプロメトイスを取り扱つた「縛られたるプロメトイス」や、父の仇を討たんとし

てその母を殺す「オレステス」などは、エスキロス思想「必要は支配する」を最もよく表はしたものである。その他「テエベに叛く七人」や、「アガ멤ノン」など現存する七篇の作品は、何れも皆ギリシヤ文化の代表的な傑作である。

凡ての戯曲家のうちで、エスキ罗斯は莊重な文體の巨匠である。彼の性格はプロンズの像のやうに粗削りであり且超人的である。また彼の詩は力と清朗とで満ちてゐる。我國の古代文學にその類例を求むれば、萬葉集の詩人柿本人麿の長歌に盛られた熱と力とに、エスキ罗斯の風貌を覗ふことが出来るであらう。

エスキロスの現存する戯曲を全部上げて置かう。この中の二三は既に邦譯も出てゐる。

アガ멤ノン (Agamemnon)

コエフオリ (Choephoroi)

ユウメニデス (Eumenides)

ペルシヤ人 (Persae)

プロメトイス (Prometheus)

セプテム (Septem)

サツプリセス (Supplices)

ソフオクレス (B・C 四九七—四〇五) はアテネの近くにあるコロヌスに生れた。小兒の時に、サラミス海戦の凱歌を歌ふ合唱隊の指導者に選ばれたことがある。二十八歳の時に、悲劇の競演に於てエスキロスを打破り、その後六十年間に彼は百篇以上 (考證によれば百二十三篇であると言はれる) の戯曲を書いた。彼はアテネに定住して二三の役に就いたことがあるが、アテネ以外の所に住むことは決してなかつた。彼の作で最初のもものと認められてゐるのは「アジャクス」であるが、トロイ戦争に關係のある物語を書いたものである。また紀元前四百四十

年頃に書かれたと思ふ「アンチゴネ」に於て、彼はエスキロスの「テエベに叛いた七人」に結果を與へたことになつてゐる。

「エレクトラ」は既にエスキロスによつて使はれたことのある挿話を戯曲化したものに外ならない。また彼の傑作「エディポス王」(Oedipus Rex) はアリストテレスがその「詩學」<sup>ポエチカ</sup>に於て理想的な悲劇として稱讚してゐる通り、現存するソフオクレスの七篇のうちでは、最も優れたものゝ中に數へられる。「テエベに叛いた七人」や「アンチゴネ」に使はれた神話の更に古い時代に屬するものである。それが如何に近代的であるかと言ふことを見るために梗概を書くことにしよう。――

コリントの市から、テエベの市に移つて來たエディポスが、女の魔神スフィンクスの謎を解いて衆望を得、この國の王位に昇つたのは、つい先年のことであつた。然し間もなくテエベの町には恐ろしい病氣が流行するやうになつたので、使をデルファイにやつて、神託を聞かせることになり、その使を待つてゐる所でこの

戯曲は始まつてゐる。神託は先王ライウスを弑逆した者を罰せよと言ふことであつたが、エデイボスは全力を上げて探してゐるけれども、その犯人は上らないではないか、と愚痴を言ふ。そこに豫言者が表れて、前王ライウスを殺したのは王その人であると断言する。王は勿論ライオスを殺したなど身<sup>み</sup>に覺えのないことなので烈火のやうに怒り、前王の妃で今はエデイボスの妃となつてゐるヨカスタの兄クレオンと、この豫言者と一味になつて、自分の位を覗ふものであると罵り、その犯人を是が非でも探し出さなければならぬと誓を立てる。

それから色いろな手懸りがあつて調べて見ると、自分がまだコリントにゐた頃田舎の追分道で不途した喧嘩から殺してしまつた男が、何でもライオス王であつたらしくなる。それだけでなく、自分の今の妻にしてゐるヨカスタは自分の生みの母であつたことが明になる。と言ふのは、ライオスの子が生れた時に、豫言者が言ふには、「この子は生長した後に父を殺し、母を妻にする運命をもつてゐるか

ら、今のうちに殺してしまつた方がよい。」と、忠言するので、使をやつて山の谷間で殺させることにしたが、使の者はこの小兒を殺すにしのびずして、コリントの羊飼ひにやつてしまふ。その生長したのが、今のエデイボス王であつた。事件の顛末が明になるとともに、ヨカスタは縊死してしまひ、エデイボス王は兩眼を抉り抜いて、この一篇は終ることになる。

この筋書によつてわかる通り、肉親相通の悲劇は何時の代にもあつたのである。それが戯曲上に一つの勢力となつたのは、近代劇の範圍になつてから起つたドイツの所謂運命劇シツクゲルドラマに見ることが出来る。我國の古代では母系のみが明で、父系は非常に曖昧であつたから、母子結婚と言ふことは普通に行はれてゐたことに相異ないが、それが大きな藝術の材料とはなつてゐない。祝詞のりことに「親と子と犯せる罪」と言ふのはこの事實を指してゐるが、倫理的の罪惡觀念を生ずる以前に、かなり長い間親と子の犯せる罪が、半ば公然と行はれてゐたことは想像するに難くない

い。

ソフォクレスは改革派の人であつたがために、エスキロスの古い作品に見るやうな、大切なコオラス（合唱團）の地位を、非常に低くしてしまつた。エスキロスに於ては、筋を運ぶ上にも是非必要であつたのであるが、ソフォクレスでは、今日の劇で見れば場の代り目にあたる所で頌歌的な歌を歌ふにすぎない。舞臺装置の上や、また俳優の衣裳換えのためには、これを無くすると不便であつたに相異なるが、筋の上の要素としては、必ずしもコオラスのあることを必要としなくなつてゐる。然しコオラスは劇それ自身のために存するのではなくて、ギリシヤ劇のコオラスの意味は、劇が萬人の參與する祭りから出發してゐて、一般の市民もコオラスには加はり得ると言ふやうな民衆藝術（フォルク・エンタテインメント）的な特殊な意味をもつてゐるので、直ちにしてコオラスを無くすることは、全然不可能であつたに違ひない。ギリシヤ劇に於けるコオラスの消長は、社會進化の上から見ても、頗る興味の深い問題である。

題である。エスキロスの頃その數五十人に上つてゐたコオラスが、ソフォクレスでは多少人數も減じてゐたであらうと思ふ。

ソフォクレスの作七篇の内、何れも劣つた作品と言はるべきものはないが、前述の三篇の外にヘラクレスの死を劇化した「トラキヤの女」なども、優れた作品である。

アジャツクス (Ajax)

アンチゴネ (Antigone)

エレクトラ (Electra)

コロヌスのエディポス (Oedipus at Colonus)

エディポス・チラヌス (Oedipus Tyrannus)

フィロクレテス (Philoctetes)

トラキヤの女 (Trachiniae)

第三の役者（シテズレ又はワキヅレ）を加へたのはソフオクレスであると言はれてゐる。それから悲劇の手法に於ては、彼は最高の位置を占むるであらう。彼の性格描寫は生彩があつて、然かも事實的であり、大きな線で、ぐつと人の胸に刺すほどの力をもつてゐる。叙述の言葉も流暢であり、對話の間にゆとりがなく、然かも全篇の構造は完全な平衡の上に立てられてゐる。彼は最も優れたアチカの悲劇作者であつた。最大と言ふ唯一の名稱を與へることに異論があつても、最も完成した作者であつたと言ふことには、誰も抗議する人はあるまい。

エウリピデス（B・C四八五—四〇七）はアチカが生んだ第三の偉大なる悲劇作者である。エスキロスの古雅な風態は、ソフオクレスによつて改革されたが、エウリピデスによつて再び古風に還元された形になつてゐる。エスキロスを雪舟の筆致に似てゐるとしソフオクレスを光琳の彩色繪に類してゐるとすれば、エウリ

ピデスは、思想と畫技の新古を折衷して獨特の家風を啓いた狩野の探幽か、或は田能村竹田にでも比べらるべき人である。

彼の故郷はサラミスである。稍々長じて哲學者アナキサゴラスの門に學んだ。そこで哲人ソクラテスや修辭家であり且哲學者であるプロタゴラスとも交を結んだ。彼は九十二篇の戯曲を書いたと言はれてゐるが、競演に於て最高の勝利を得たのは僅かに五度にすぎない。現在する彼の戯曲は、彼の作であるかどうか、尙考證の餘地のある「レソス」を加へて十九篇である。彼は懶け者の性質を多量に持つてゐたので、主としてサラミスに孤獨の生活を送つたのであるが、その晩年はイケドニヤの王アルケラウスの宮廷にて、歡待を享けながら滞在してゐた。

エウリピデスは、彼の生存中はそれ程の歡迎を受けなかつたけれども、後の時代や、また現代に於ては最も人氣のある作者となつてゐる。この理由と考へらるべきは、第一に彼の感情が全く個性的であり、第二にはソフオクレスの華麗に狎

れたアテネ人の眼は、エウリピデスの抒情詩に表現された素描的な美を鑑賞することが出来なかつた。第三に、彼はアテネの人があまり好んでゐない實際生活の批評と言ふ點を強調してゐたので、時代の思想に合せなかつた——以上の三つの理由によるものと考へられる。實際彼の戯曲は、その構想が弱いので、観客（讀者）は稍々もすれば退屈を覚える。また白（芝居の言葉）が平凡であり、屢々悲劇の品位を缺いてゐるので、アテネ劇場に於て歓迎せられなかつたのは、寧ろ當然の結果と言はれねばならない。

エウリピデスはその手法から見れば、多少復古的な人であるけれども、コオラスの位置をエスキロスの昔にかえすことは出来なかつた。純粹な劇といふ立場から見れば、非常に古風な——少なくともドイツランボスの遺迹にすぎないコオラスは、彼の作品では、筋の上の邪魔物となつてゐる。彼はまた古くから傳はつてゐる多くの傳説を、彼一流の意見によつて書き改めてゐる。そこで當時のアテネ市民

から誤解を受ける心配があつた。エウリピデスはその點を氣兼ねしたものと見えて、近代的な意味の序曲をつけて、この誤解を防がうとしてゐる。セイクスピヤの劇に見る様な前口上や、ゲエテのファウストに見える天上の序曲などは、その意味を少し異にするけれども、序曲を使つたと言ふ點は、ギリシヤ劇に表れた著しい變化の一つと見て差支へないと思ふ。その序曲は劇の筋を運ぶ上からの必要ではなくて、實際は観客に向つて話しかけてゐるのである。

神が舞臺上に現れて來ることは、悲劇の一般を通じて、よく繰り返された手段である。然しエスキロスに於ては、全體の雰圍氣が非常に世間離れしてゐたのでこの方法が必ずしも不自然ではなかつたが、エウリピデスに於ては、その題材が當世風の取り扱ひによつて上演されてゐたので、神の出現と云ふことに就いては古風のまゝの手法を用ふることを許されなかつた。このために新しい用法を考案してゐるのが「タウリスのイフゲニア」などに覗はれる。エウリピデスはよく神



を使つてゐる。特にアポロを好んで使ふのであるが、神は惡をなすことの出來ないものである、と言ふ在來の信仰に反對して、彼に於ては、神も尙根本惡（この言葉はカントが使つたのであるけれども、こゝでは哲學的の意味をもつてゐるのではない。）の所有者である。元來ギリシヤの神は、神と言つても人間と同棲したり、人間の如く闘つたりするので、この點は古事記神話の高天原オウソノハスと同じ世界であるが、エウリピデスの戯曲に到つては、神が全く人間性を所有するものとなつて現れてゐるのである。色いろな理由から考へて、彼はアナキサゴラスの宗教哲學などを戯曲に織りこんで、表面上には神話の形をかりて、その實在來の原始思想に反對したものではないかと思はれる。

手法の上から見れば、エウリピデスは復古主義の人である。コオラスが筋を運ぶ上の邪魔物となつてゐることは既に説明した通りであるが、コオラスの出る度數だけから見れば、ソフオクレスよりも遙かに多い。然しそのコオラスが如何に

戯曲の中に溶和してゐるか、と言ふ點を調べて見ると、エウリピデスに於ては、コオラスは最早無用である、と言ふことが明になるであらう、これはソフオクレスにも當てはまる事實であらうと思ふ。ギリシヤ劇は近代的の意味から見ても一幕物であるがために、また俳優の扮装を換へるためや、俳優の數にも制限があつたので、その間の二次的の必要から、コオラスが配してあるのだと解釋すれば、さう解釋されないことはない。それでコオラスをこつそり取り去つて、その代りに場シーンを切るやうにし、コオラスの代りに、立衆たちしゅうを使ふようにして、言葉を韻文にせず、散文を喋らせることにすると、全く近代的的一幕物が出來ることになるであらう。コオラスは能たてしめの立衆にあたるものである。立衆と言ふのは、シテヅレまたはワキヅレなどが多數打つて出る場合を言ふので、例へば七騎落に出る頼朝の從者五人のやうな役を指すのである。

エウリピデスのコオラスは、全篇と融け込んでゐない。少くともエスキロスの

コオラスが自然的であるのに反して、彼は不自然的であると言はるゝであらう。これは彼の罪ではなくて、時代の罪である。彼の用語は、他の作家ほど線が大きくなく、對話の文句は日常語そのもののやうに簡單である。然し時としては巧な修辭法や、莊麗な美句を驅使して、愕くべき効果を伴つてゐる場合もある。またコオラスの中の抒情詩などは、響の柔かい言葉の共感樂シンフォニーの中に我々を恍惚とさせることがある。

エウリピデスの現存する戯曲は凡べて十九篇であるが、中には多少疑問の多い作品もあるので、それを除外すると、次の十五篇は、エウリピデスの著作の中で最も優れてゐると言はれてゐる。

アルセスチス (Alcestis)

アンドロマケ (Andromache)

バッサナ (Bacchae)

シクロウプス (Clylops)

エレクトラ (Electra)

ヘクバ (Hecuba)

ヘレナ (Helena)

ヘラクリデ (Heracleidae)

ヘラクレス・エトヘムニス (Heracles Furens)

ヒポリタス (Hypolytus)

メデヤ (Medea)

オレステス (Orestes)

フェニツセ (Phoenisse)

レンス (Rhesus)

トロアデス (Troades)

多くの注意が、エウリピデスの女に對する態度に就いて注がれてゐる。一般に彼は女嫌ひミソギニストであつたと言はれてゐるが、彼の主張としては、男性によつて勝手に考へなされてゐる婦徳の代りに、彼女たちの眞の善と惡との性質を表現しようとする努力したものである。

希臘悲劇と能とを比較研究すると、その間には面白い事實を多く見出すことが出来る。然しそれは人間の思想の發展、特に藝術の形式が、全く別個のものとして生長して來ても、全然性質を異にしたものではないと言ふ事實である。それ等の異つた形式の間に或る一般的な方式を求めて、數群の形式を作り上げ、それを更に心理的に發生とか、變遷とかを研究することが文學論の一方法である。これ等の方法は比較宗教學とか、比較神話學の間では既に早くから用ひられてゐるのであるが、文學研究の部門としては、まだその存在が極めて軽く見られてゐる。

時の變化に従つて發展した時間的研究と同時に起源を異にして、然も形式の同じ文學を空間的に研究することも等閑にしてはならない。こゝでは文學研究の方法として、比較と言ふことが學的に成立すると言ふ、一般的な説明をしようとするのではなくて、ギリシヤ劇に獨特なサチユル劇 (*Satyr Drama*) と、能樂 (これを完全に言へば猿樂の能である) に附隨して起つた狂言との間の類似を、簡単に考へて見たいのである。

サチユル劇は現存するものは、唯一篇しかないもので、これと百篇以上も存在すると言はれてゐる狂言とを、その本文の上からだけ比較することは不可能である。然し人間の心理から見て、室町時代の人々が能樂だけでは、その美感を満足させることが出来なかつたやうに、宗教的意味の深い、解り易く言へば堅苦しい、美の一方に偏した悲劇だけで満足することの出来ないのは當然の理由であるが故にもしサチユル劇がなかつたとしたならば、ギリシヤ人は他の形式によつて、悲劇

よりも、もつと異なつた美を表現する劇を考へ出したに相異なる。美的欲求は必ず圓滿に起るものである。個人に於てさうであると同時に、社會に於てもさうである。また一つの時代一つの世紀について見ても、眞に藝術を理解する人、社會世紀に於ては、必ず美的要求は圓滿を要求するものである。然しこれは主觀と物欲だけあつて、藝術的訓練のない人、社會、時代を問題としてゐないことは勿論である。ギリシヤ人のごとく、彼の偉大な藝術を完成し、これを鑑賞することを知つてゐた人々の間にあつて、崇高即ち悲劇美のみを唯一の美と考へてゐる理由はない。悲劇を喜ぶ事實は必ずフモオル即ち喜劇美を豫想してゐて、その美は完全なものである。

然らばサチユル劇とはどんなものであるか、と言ふにエウリピデスの「シクロウプス」が嘗一篇残つてゐるので、これによつて見らるゝ通りに、悲劇でもなければまた喜劇でもない。然し兩方の形式を混合したものででもない。その性質も發

達も、全く原因を異にしてゐる。その起源は悲劇と同じくドイツランボスにあるのであるが、外形的の著しい相異はコオラスが必ずサチユルと言ふディオニッスの召使で、山羊によく似た半神半獸の人間からなり立つてゐることである。最も注意すべきは、その内容が宗教的眞面白さと、對照をなしてゐたものであるといふ點に存する。

元來ギリシヤ悲劇の標準的な形式は三部曲をなす一組の悲劇と、それに必ず一篇のサチユル劇を加へた四部作であつた。上演される場合も、この順序によつてゐたものであると思はれる。それでこのサチユル劇は、悲劇の息の詰まるやうな悲劇美を緩和するために配せられたと解釋できるのである。かく解釋することによつて、サチユル劇の存在は、單にドイツランボスの遺物であると言ふ以上に、價值のある存在となり得る。

狂言の存在する理由も亦これと同様である。能樂の内容はギリシヤ劇と同じく

宗教的であり、象徴的であつて、内容も和漢の古事とか歴史、傳説と言ふやうな範圍に亘り、靜肅な重苦しいものであつたがために、美の別の範疇に屬する狂言を要求するやうになつた。狂言は單にシテとツレのみ出るのがその普通な形式である。シテ（主人公）は大名か公家か、身分の高い人で、然かもきまつて無智である。その召使（ツレ）との間に滑稽が交されて、主人公の愚かさを強調すると言ふ仕組で終つてゐる。時には「船ふな」のやうに、互に博學ぶりを戦はす趣向もあるけれども、これは寧ろ形式の例外に屬する。主人公が「あるかやい？」と言ふと、召使が「おん前に。」と答へる一つの形式に始まつてゐるやうに、サチウユル劇ではサチウユルのコオラスと對話が交されるのである。サチウユル劇も狂言も、悲劇の端として起つた美の他の形式であると言へる。これがもう一步進むと、喜劇になるのであるが、ギリシヤの喜劇も亦特殊の發展をなしてゐる。それを我々は次の章に於て考察して見よう。

## 第四章 喜劇

喜劇（コモデイア）と言ふ言葉は、これを語源的に見れば、コムス（行列）と言ふ言葉と、オムデ（歌）と言ふ言葉から成り立つてゐる。この合成語そのものが明らかに示してゐるやうに、喜劇は行列の際の歌から起つたのである。春になつて醺酔した新しい葡萄酒に酔つて、若い男女の群が他愛もなく町の中をねり歩るいて行くディオニソスの春祭りは、どの國の古い歴史にも見える通り、國民生活の中の事實であつた。枕の草子に見える葵祭の記事のやうに、老人も小兒もまた貴となく賤となくこの祭を、我事のやうに喜び興じたのである。その時に彼

等の口に吟くちすされた歌詞が、こゝに言ふ所の喜劇の起源となつた。中には町の四辻に立つて、田舎芝居の町ぶれのやうな口上を述べ立てた者もあつたであらう。彼等の中には假面をかぶつて聲高く歌つた者もあらう。おかしな身振りをして、市の人々を笑ひ崩れさせた人もゐたであらう。悪口もあつたらう。それ等の凡てが喜劇の直接な原因となつて、その要素の中の重要なものとなつたのである。

然しこゝに今一つの異論がある。それはコモスを田舎歌コの意味に取る論者の説であつて、トラゴデイア（悲劇）が都會の劇であるに反し、コモデイアは田舎の劇であると説くのであるが、コモスの語源その物はしばらく別問題として、都會と田舎とを區別することは、ギリシヤ當時の社會状態から見て、到底考へられない説である。ギリシヤは一つの中心をもつた國家組織ではなかつた。後世の考へによればアテネが都で、他は田舎であると言はれるであらうが、アテネ以外にも都は澤山あつて、誰もアテネを唯一の中心である考へる者はゐなかつたのであ

る。然かも喜劇はスパルタを中心にして隆盛であつたが故に、アテネと伯仲の勢力を持つてゐたスパルタを、田舎だと考へる理由は少しもない。この説を有力なものにするには、これ等の反證を充分説明しなければ成り立つことは出来ないで、今日この説を學説として信ずる人はゐなくなつた。

アリストテレエスの説によれば喜劇はドリヤ人（スパルタ）から起つたものであると言つてゐる。この説は近年スパルタから喜劇用の假面の發見されたことによつて證明された。また同じくメガラやシシリイ島からも假面が出たので、喜劇の演ぜられたことを物語つてゐるのである。それがアチカ（アテネ）に輸入されたのは、多分旅藝人の仕事であらう。久しい間公の存在としては認められなかつたけれど、ドリヤ人の間の祭に於ては、段だん勢力を得るやうになつて來た。

喜劇の歴史に表はれる最初の功勞者は、クラチヌス（B・C 五二〇—四二二）であるが、彼は今までの喜劇作者が「されごと」で終つてゐたのに反して、時事

問題を取り扱つた政治的な喜劇を始めた人である。クラチヌスやまた初期の喜劇については、餘り残つてゐない。たゞ彼等は政治上の敵手に對して、容赦する所なく攻撃の先を向けてゐたことや、彼等のうちの或者は、アリストファネスの相手になつてゐたことは、覗ひ知ることの出来る事實である。

アリストファネス(B・C 四二七—三八八)はギリシヤ古喜劇の最大なる作家である。彼の初期の作は政治問題に關してゐたもので、主として保守黨を擁護しようとしてゐる。その中で主な作品は「アカルニア人」「騎士」「平和」がある。その作「雲」に於ては、詭辯學派の人々に嘲笑の矢を向けてゐるが、その代表者としてソクラテスを選んでゐるのは、誠に面白い事實であると言はなければならぬ。「胡蜂」<sup>やまばち</sup>ではその當時のアテネ人が持つてゐた喧嘩ずきな性格を罵詈してゐる。「鳥」は仕組の變つた作品で、中空に作つた鳥の町のことについて書かれてゐる。これは野心の多いアテネ人を諷刺したものであらうと思はれる。彼の主として政

撃したのは、クレオンやその當時の煽動政治家たちであつた。そしてペロポネシヤ戦争(B・C 四三二—四〇四)の勃發したことを大いに嘆いてゐるが、彼の作品「ルシストラタ」に於てはギリシヤの婦人達が、ペロポネソス戦争を阻止するやうな計畫を企てゐると言ふ仕組みが書いてある。他の二つの喜劇「テスマフォリアアズサ」と「蛙」に於ては主として正統なアテネ人に喜ばれなかつたエウリピデスを題材としてゐる。また「エクレスシアズサ」では、その當時社會的の勢力となり始めてゐた社會主義の勢力と、婦人の権利と言ふ考へ方を、一笑に附してゐる。「プルウタス」に於ても、同じく當時の社會に表れた富の問題を取材としてゐる。

古喜劇は纏まつた構想を持つてゐたと言はれることは出来ない。その作法は多少夢幻的な要素をもつてゐる。その中に取り扱はれた問題も、結極きまり文句を反覆してゐるにすぎない。悲劇と同じやうに、喜劇にもコオラスがある。その歌

は、幕の切目に、歌はれるものであつて、常に讃歌や、祝祭の歌を誇示的に模倣してゐる。然しこゝに喜劇に特殊な一つの様式がある。それをパラバシス (Parabasis) と言ふ。合唱團がその戯曲を作つた詩人の名によつて觀衆の方に向ひながら話しかけることである。これは悲劇の中に出てゐた序曲が更に變化して、この形式になつたものであると説明することが出来る。アテネの喜劇はパントマイムの一種であつた。然かもその喜劇は眞面白な目的を缺いてゐるのではなくて、巧妙な諷刺から、人を笑殺させるやうな粗野な道化役に至るまで使つて、時事問題を批判したものである。

アリストファネスの文體は恐るべき強い力をもつてゐる。喜劇的の毒舌に到つては、シエリダンやシエクスピアなどの巨擘と、並び稱せらるべきである。彼の奇智は常に新しく元氣潑刺としてゐる。アリストファネスには抒情詩の作もあるが、高い詩的な感情と、自然に對する美しい愛とを現はしてゐる。

アリストファネスの喜劇のうちで、現存してゐるものは次の十一篇である。

アカルネンセス (Acharnenses)

アベス (鳥 Aves)

エツクレシアズセエ (Ecclesiasusae)

エクイツテス (平和 Eputies)

ルシストラタ (Rysistrata)

ヌベス (雲 Nubes)

パツクス (Pax)

プルウツス (Pitias)

ラウネ (Raune)

テモフォリアズサ (Themophoriasusae)

ベスバ (夕方 Vesper)



古喜劇について中世喜劇が表れる。中世と言ふこゝに用ひた言葉は、ギリシヤの中世の意味である。古喜劇と中世喜劇の間には、明瞭な區別はない。アリストファネスの最後の喜劇「プルウツス」の如きは既に後期の作品に屬すべきものであることを示してゐる。この派には政治的又は個人的な諷刺は見出されない。その作劇の手法は主として人間の性格に關係してゐた。即ち奴隸とか料理人とか言ふやうな下層社會の人物を喜劇の材料に使つてゐる。婦人も重要な役を務めるやうになつた。コオラスは幕の切目に、形式的に歌はるのみである。中世喜劇は殆んど一篇も傳はつてゐないので、その組織を知ることが出来ないけれども、前述の「プルウツス」によつて、大體の面影を知ることが出来る。

中世喜劇の作者として、その名前だけ我々に傳はつてゐるアンチファネス(B・C四〇四—三二八)は二百三十篇の喜劇を書いたと言はれてゐる。ツリイのアレキシス(B・C二九〇—二八八)はプラトン學派を嘲笑した。またチモクレスはデ

モステネスを攻撃した。彼等の材料は神話とか社會とかまたは哲學の方面にまで擴がつてゐた。今までの戯曲が上演されるためのもので、決して讀むための戯曲ではなかつたのに反し、この時代の喜劇は舞臺に上せると言ふよりも、寧ろ讀むために書かれたものであつたらしい。

その後に起つた新喜劇も中世喜劇と別に本質的な相異はない。その代表者メナデルは、ギリシヤが生んだ最大の喜劇作者に屬する人である。彼はロオマ時代や、近代に於ても尙模範となつた多くの優れた技術をもつてゐた。メナデルはエウリピデスが悲劇のために残した功績と同じ功績をもつてゐた。また他の例をとれば、哲學に於けるソクラテスの位置に立つ人である。彼の言葉として傳へらるゝものにプロタゴラスの言つた「人間は萬物の尺度なり」によく似た「人間の純粹なる研究は人間である」と言ふのが、人に知られてゐる。然しエウリピデスが、それ程成功した後繼者を残さなかつたに反して、メナデルは一つの傳統を

始めて、それが今日も尙生存し實を結んでゐる。

彼は紀元前三百四十二年から二百九十一年までアテネに住んでゐた。そして快樂派の哲人エピクロスの友人テオフラスタスの門弟であり、また當時美貌によつてギリシヤ第一の名を唱はれてゐたの愛人である。彼は百八篇の戯曲を書いてゐるが、完全に今日まで傳はつてゐるのは一篇もない。しかし彼の原文は諸所に引用されてゐるし、且六篇だけは全部ではないが、大部分残つてゐるので、それによつて彼の藝術を見ることが出来る。彼の作品は、その題材を日常生活の中の愛とか争鬪とかから取り出してゐる。言葉は平易であるが、自由な修辭法によつて、音吐朗々誦すべきものがある。彼の名を不朽ならしめるものは、その心理解剖の愕くべきほど鋭利な點に存する。彼の筆致は、今日と雖も、多くの讀者を迎ふるに足りるであらう。何故なれば彼は近代の意味の新しさをもつてゐるから。また人の心を最も鋭いメスで、見事に戯曲の俎上に載せてゐるから。そこに

は人間が表はされてゐるから。

## 第五章 散文の發達

紀元前六世紀に到るまで、文學としての散文は、何等の勢力をも持つてゐなかつた。然し使用せられてゐなかつた、と言ふ譯ではない。今までは記録や論文や財産目録（インベントリ）や、法律とか告文とかに限られてゐた散文が、イオニヤの哲學とか歴史家が表れて韻文では表現の出来ない問題を考へるやうになつてから、初めて文學として存在するやうになつた。哲學や歴史が、意味の廣い文學であるには相異ないが、感情を主とした文藝でないことは異論はあるまい。それ等の人の文章が優れてゐたとか、思想が深遠であつたとか言ふことは、古い文學では大きな問題となつたのである。然し今日の我々はそれをも文學として取り扱ふには、多くの不満を感じるものである。散文は小説と隨筆と批評などの方法として用ひられた時に、初めて文學であると主張したい。然しこの頁を白紙にすることは、從來の慣例もあるので、あまり奇を好む者であるとの非難を受けるかも知れない。そこで一通りの記述だけは録しておかうと思ふ。

イオニヤ人の中には、自然を合理的に説明しやうと考へる人が出て來た。その代表者は哲學の祖と言はれるタアレスである。アリストテレエスの書いたものの中に、タアレスが「萬物の根源は水である。」と言つたと見えてゐるので、今日では、彼が西洋哲學の鼻祖であると言はれてゐる。彼はまた紀元前五百八十五年の日蝕を豫言した程の、優れた天文學者であつたと言ふ。萬物流轉（ペンタライイ）と言ふロゴスによつて有名なヘラクライトスはエフェソスの王族であつた。その「自然論」の斷片が残つてゐるが、晦澁難解のために、「謎を掛ける人」とか「暗い人」とか言はれて

わた。彼は萬物の根源は火である、と言つてゐるが、當時はペルシヤとの交渉が漸く紛糾しやうとしてゐた頃であるから、或はペルシヤの拜火教の影響であるかも知れない。詩篇を残してゐるバルメニデスも亦著名な哲學者である。彼の四百七十篇の詩は序篇、眞理門、俗見門の三部に分れてゐる。ペリクレスやエウリピデスの友人であつたアナキサゴラスは精神の神性を主張した。またデモクリトスは原子論を稱へ、唯物論の祖であると稱せられる。

歴史はロゴグラフィア (Logographer) の書いた散文の中にその萌芽を認めることが出来る。ロゴグラフィアと言ふのは古代の傳説を散文に書いた人々のことである、その代表者としては、ミレトスのヘカテウスといふ人があつて、イオニヤがペルシヤに反亂を起したころ彼はその政治上の顧問になつた。彼はまた旅行家であり、地理學者であつた。その旅行記はヘロドツスによつてよく引用されてゐる。レスボス島のヘラニクスは、古代から彼の時代 (B・C 四百三十年頃) までのア

テネの歴史を書いた。

史學の父であると言はれてゐるハリカルナツススのヘロドツスは凡そ紀元前四百八十五年頃生れた。政治上の壓迫があつたのと、旅行好きな性癖から、彼は小アジアやバビロンやエジプトの方面を旅行した。彼はしばらくアテネに住んでゐたこともあり、アテネの植民に加はつて、伊太利のチュリイに移つたことがある。彼の主な作品は久しく東西の大問題となつてゐたペルシヤ戦争を取り扱つたものである。ヘロドツスはアテネの悲劇作者たちとも親交があり、エスキロスの影響を受けた點が多い。ヘロドツスは物語作家であつた。彼は別に政治的意味のために、事實を探さうとはしなかつた。ただ面白くて戯曲的でさへあれば、それで充分であつた。彼の用語はイオニヤの文語である。それを彼れ自身の修辭法によつて流暢に書き綴つてゐる。後世のアレキサンドリヤの學者たちが、彼の書物を九冊に分けて、その一冊毎に文藝神の九人の名を冠してゐる。「ペルシヤ戦争記」は

紀元前四百七十五年のアテネ人がセストスを侵掠した事件で終つてゐる。彼は自分自身で戰場を経験した譯ではなく、また批評的方法を知らなかつたので、全部が眞であると信ずることは出来ないけれども、この大戦争に關する我々の知識は主として彼から流れ出てゐる。宛も太平記が史料としては決して完全なものではないけれど、多くの眞と、史料の缺陷を補つてゐるので、南北朝時代の研究には是非なければならぬ本であるやうに。彼はまた最も面白い物語本の作者であつた。それは今日にも尙殘存してゐる。

紀元前五世紀の後半は、ちようど支那や我國に戰國時代があつたやうに、希臘の戰國時代であつた。それは政治上に於てさうであるだけでなく、思想界に於ても、<sup>ソフィスト</sup>詭辯論が勢力を得て、論理の戦が鎬を削られてゐた。詭辯論者と言へば、近代的にはよくない意味を伴ひ易いけれど、論理主義者に外ならない。プラトンの著書によつてその名を知られてゐるアプデラのプロタゴラス(B.C.四五〇年頃)

は文法と修辭學及び倫理學を講義してゐた。彼の宗教に對する意見がその當時の人に入れられずしてアテネの人に告發されたので、彼は遂に逃亡した。レオンチニのゴルギアスは修辭學の大家として有名であつた。彼は紀元前四百八十五年頃シシリ島に生れ、紀元前四百二十七年以後公使としてアテネに滞在した。これから後のギリシャの修辭學は、彼の影響を受けた所が多い。詭辯論者は時流に反抗したにすぎない。純理論を翳して平凡道徳を痛罵したにすぎない。老子や莊子列子などの思想が正統派たる孔孟の説を入れられないがために、これを異端視したことが、反つて支那を形式主義の囚にしてしまつた。彼等を破壊主義のやうに言ひ、單なる虚無主義のやうに主張するのは、惡意ある宣傳である。なる程詭辯論者はその頃善良なるアテネの市民でなかつたに相異ないけれども、その善とは誰が考へた善であるか。言ふところの善とは畢竟するに時代思潮の迎合に外ならない。ソフィストや老莊思想が、今日の道徳の如く、笑をもつて迎へらるる時代は、

永久に來ないかも知れないけれど、偽善なる善に挑戦してゐるその熱と力とは、偽善か如何なる假面をかぶつて表れて來ようとも、これを痛罵してやまないであらう。我々はカルチュア（教育）のために心に潜びこんでゐる奴隸的なものを克服して、自主的に善と惡とを明らかに考へ分けなければならぬ。老莊の思想と儒學の思想は、その根本に於て同じものであるとか、ソフィストも尙正統思想の一分派にすぎないなどと言ふ同情の假面で表れた魔醒劑を排撃して、白日の下を歩く我々の姿を見出さなければならぬ。さうしてこそそこに横はつた善が、果して善であるか、惡であるかが明に知られるであらう。

ヘロドツスに續いて希臘史學の母と言はれるツキデイデスは紀元前四百七十一年から、四百六十一年までの間に、アテネの近くで生れた。彼はソフィストの學說を非常に多分に受け入れた人であつた。彼は貴族の出身である。その家も富有

であつた。修辭學を雄辯家アンチホンに學んだ。ペロポネシヤ戰爭の始まつた初年に、彼はアテネに住んでゐた。紀元前四百三十年に流行病に罹つたけれども、間もなく恢復した。その後政治上の失敗があつて流浪してゐたが、その間に彼は「ボロポネシヤ戰爭記」の腹案をこしらへた。そして實際の戦地を歴訪し、また政治の變動を注視してゐた。

彼の書物は八冊から成つてゐるが、最初の七冊はボロポネシヤ戰爭の終つた後に訂正されたい痕跡をもつてゐる。この書物の順序は極めて組織的である。第一巻は序文であつてその中にアテネの發展と、戰爭の導火線のことを述べてゐる。二三四には戰爭の様子が書かれてゐる。それから五巻は紀元前四百二十一年のニシアスの平和會議と、シシリヤ遠征以前の紛争が載せられてゐる。その後の問題を六七の二巻に取り扱つてゐる。第八巻は紀元前四百十一年までの事件を含んでゐる。その筆は雄健精緻を極め、希臘散文の模範である。

この時代の散文作家として、文學的に前の二人よりも顧られてよい人はクセノホンである。クセノホンは紀元前四百三十年ごろアチカに生れた、一時ソクラテスの弟子となつたこともあるけれど、ソクラテスを理解することは出来なかつた。と言ふのは彼の作「ソクラテス追想録」(普通にメモラビリヤと言ふ)に、ソクラテスを極めて常識的に解釋してゐるから。要するに彼は素人の雜文作家にすぎなかつたけれど、前の二人よりもいゝ意味の作家である。スパルタの王アゲシラウスに従つて戦功があつたので、オリンピアの近くに領地をもらつた。そして田舎騎士で終つた。彼の作に「エコノミクス」と言ふのがある。家庭内に起つた對話と、田園の經營法を説いてゐる。「アナバシス」は彼がキルスに従つて遠征した従軍記である。「ヘレニカ」はツキデイデスの「ボロボネソス戦争記」の續篇として書かれたものに外ならない。「クロベデイア」には彼の教育に關する意見を述べてゐるけれども、傾聽する説をもつてゐた譯ではない。彼の言葉は純粹のアチ

カ語ではないが、雜文としては上乘の部に屬するものである。彼の作にして現存するものは次の數篇である。

- アゲシラウス (Agesilaus)
- アナバシス (Anabasis)
- クロベデイア (Cyropcedia)
- デ・セ・エケストリ (De se Equestri)
- ヘレニカ (Hellenica)
- ヒパルキクス (Hipparchicus)
- メモラビリア (Memorabilia)
- エコノミクス (Oeconomicus)
- アテネ共和國 (De Republic Atheniensi)
- シンホジウム (Symposium)

第二流の歴史家が、紀元前四世紀のころ榮えた。テオスのテオポンプスはクセノポンの「ヘレニカ」の續篇と、マケドニヤ王フィリッポの歴史を書いた。エホルスはドリヤ人の出現から、紀元前三百四十年までの歴史を書いて、後の歴史家に多くの材料を供給してゐる。彼等とともに修辭學者イソクラテスの弟子であつた。尙この外に近年になつて第四世紀の戦争を書いた多くの寫本が發見されたけれど、その作者は明でない。多くクラチプスと言ふ人が、その作者ではなからうかと想像されてゐる。單なる想像說以上の有力な考證は、これから後に俟つべきであらう。

# 欠



# 欠

## 第七章 アテネの雄辯術

修辭學は雄辯術と結びついてギリシヤに於て隆盛を極めた。教育の科目にある修辭學は文章の上に就いてよりも、主として演說術として訓練されたものである。故に修辭學者は雄辯家であつた。これが隆盛になつた原因としては、オリンピヤの競技の中に、雄辯術をも重要なものとして、その地位を占めてゐたことが有力な原因のうちに數へられる。その名の我々に傳はつてゐるもののうちでは、アンチホン(B・G四八〇―四一一?)が最も有名な人の一人である。アンドシデス(B・C四四〇―三九〇?)は「神秘に就て」とか「平和に就て」などの演說を残してゐ

る。後者は紀元前三百九十一年にスバルタに使用して後感づる所あつて發表したものである。

アテネの法律によれば、訴訟者は自分の事件を辯護しなければならなかつた。その文句は専門家に書いて貰つて、それを誦すること許されてゐたので、雄辯術の効果は直ちに法廷に於てその力を表はすやうになつた。その作家として著名な人はリシアス(B・C四四〇—三八〇?)である。彼の最大な傑作は「エラトステネスを懇ふ」であるが、これは三十人の人々に纏まる非法を難詰した力のあつた、戯曲的な雄辯である。四百以上の作品があると言はれてゐるけれども、現存するものは三十篇にすぎない。彼の模倣者にイサエウスがある。リシアスほど力強くなく、寧ろ技巧に於て優つてゐる。現存する彼の十一篇は主として繼嗣問題に關係したものである。

イソクラテス(B・C四三六—三三八)はアテネの最大なる修辭學者であつた。彼

は紀元前三百九十三年に學校を開き當時の著名な雄辯家を多く養成した。彼の作つた二十一篇の演説と九十の書翰とが残つてゐるが、政治問題を論じたものが多い。最も重要な作品は「バネグククス」であつて、それに依て彼はマケドニアのフィリップの如き人を盟主にして、ペルシャに當らなければならぬことを主張してゐる。イソクラテスは文章に耽つた人で、その當時の文體の最も完成したものであると言はれる。

デモステネス(B・C三八四—三二二)はアテネの最も優れた雄辯家である。彼は孤兒であつたけれども拮据勉勵の結果、その天才は大いに伸長して遂にアテネの主導的勢力となつた。デモステネスの雄辯の歴史は、即ちアテネの歴史に外ならないと言はれてゐる。その頃北方にマケドニアが起つて、アテネの存在を脅したので、こゝに愛國心が勃然と燃え上つて來た。デモステネスはこの時代思潮の先登に立つて、大いにマケドニア王フィリップの野心を指摘し、「第一のフィリップ

「攻撃」の中に、全希臘の連合を組織せなければならぬことを主張した。紀元前三百四十九年にフィリッポがカルシデイス（國の名）を攻撃した時、デモステネスは「オリンツスの演説」の中に、市民兵を遣つてオリンツス（市の名）を救ひ、その町の祝祭から取れる財源をもつて、戦費に當てねばならぬことを絶叫したけれども、中々實行されなかつた。ヒロストラトス（B・C三四六）の平和條約の後には、彼はマケドニヤ黨を攻撃した。「ミディアスに與ふ」や「伴れる使者」がこの間に表れた。その後ケエロネヤの戦（B・C三三八）があつて、希臘はマケドニヤの配下に征服されたけれど、デモステネスは毫も屈せなかつた。彼の敵手であるマケドニヤ黨のエスキネスとの立合演説に於て、彼は完全に勝利をおさめ、エスキネスはアテネを逃亡しなければならなくなつた。この時の演説が最も有名な「王冠に就いて」である。彼もその晩年には極めて落ぶれた生活をした。

この時代のアテネの周圍には、東方には彼斯があり、北方にはマケドニヤが蜂起し、更にボロポネシヤ半島にはスパルタが蟠居してゐるので、恰も支那の春秋戰國時代のやうな有様であつた。北方に強秦が起つて後は、小さな列國は秦と同盟すべきか、小國連合してこれに反抗すべきか、と言ふ問題が、國家存在の大問題であつた。そこで蘇秦や張儀の如き策士が表れて、辯論の術が大に行はれ、或は合縱がっしやうの策を稱へ、或は連衡れんかうの策を叫んで、一國の政策は彼等の舌三寸によつて左右せられてゐた。デモステネスが支那の蘇秦にあたる人であるとすれば、張儀にあたる人はエスキネスその人である。

エスキネス（B・C三五七—三三〇）は、マケドニヤに味方して、國士デモステネスの好敵手であつたが、二人の間にはどちらを勝利であると決することの出来ないほど、伯中の技巧をもつてゐた。然し紀元前三百三十年にデモステネスのため敗をとつた後はロオドス島に引退して、教師として暮してゐた。彼は天成の

雄辯家ではないけれども、尙有名な政治家であり、強い雄辯力をもつてゐた。彼の文體は多少舞臺的である。そして詩的な言葉を多く含んでゐる。デモステネスのやうに愛國的な熱情は逆ばしつてゐないけれども。彼は決して理想に走らず、目前の眞理を擱んでゐたので、歴史の判決は、エスキネスの政策を正義であつたと認める傾向がある。

ヒペリデス(B・C三八九—三二二)はデモステネス派の政治家であつた。そして熱心にマケドニヤに反対した、マケドニヤ派の政治家を告訴して、これと辯論を戦はした。後彼はフィリップに囚へられて死罪に處せられた。彼の傑作は「弔の演説」である。技巧はデモステネスに遥かに及ばない。そして大政治家の演説としての品位を缺いてゐる。リクルグス(B・C三九〇—三二四?)も亦愛國黨の人であつた。彼はイソクラテスに學び、後アテネの主な財政上の支配者となつた。彼は市を美化することに全力を注いだ。そしてアクロポリスの南側に今日も

尙残つてゐるディオニソスの大劇場を、彼の管理によつて建築させることが出来た。彼の雄辯は愛國の熱で一杯になつてゐる。その今日まで残つてゐる「レオクラテスに與ふ」などは辛辣を極めた、誠に手酷しい攻撃である。

## 第八章 希臘頽廢期と羅馬思想

上述の時代は純希臘時代（Hellenentum）であつたけれども、マケドニヤが全希臘を統一して、アレキサンダー大王の大帝國が出来てより後は、種々の外國思想が混入し、後世の所謂希臘頽廢期（Hellenismus 普通に希臘主義と言ふ。）が現れた。大王はアテネに榮えた文化の下に立つことを潔しとせず、これ以上に東西の文化を融合した一大文化を作り出さうとして、アレキサンドリヤの市を建設した。言葉の如きもアチカ語は僅かに文章語として殘壘を守るやうになり、新しく世間に通用する夷振の<sup>ひびかり</sup>コイネ語が、全ギリシヤの思想交換の方法として行はれ

た。言語だけについて見ても、この後羅馬の支配にあつた頃や、ビザンチンの影響を受けた頃、實に目まぐるしい變化をしてゐる。新譯聖書の言葉も、埃及にて發見された無數の文獻と同じく、この時代の言葉に外ならない。然し野心ある希臘の作家たちは、何れの時代たるを問はず、最も高尚な希臘語によつて著作した。それ等の人の文章にも、時代の全視野を蓋ふてゐた野人の語の竄入を絶対に防ぐことは非常に困難であつた。ニイチエの言葉を假れば、正に希臘文化の墮落である。

## 詩について

夷風の言葉は散文に於ても放果が少なかつたけれど、詩について見れば全く打こわしであつた。それは空想力をなくした。そして人の心に觸れる何物をも持たなかつた。この時代の詩人は或る選ばれたる聽衆のために書いた。彼等の街學的な詩は、多くラテン詩人の模範となり、その生硬さと無雜さとはアレキサンドリ

ヤ派の詩人を通じて、羅馬にまで影響した。然し二つの新しい詩の形式が表れた。則ち田園詩イディルとマイム(Mime)であるが、これが一般に廣く流行するやうになつた。

## 田園詩

この一群の詩は希臘以來の田園詩に技巧的な形式を與へて希臘末流時代にまで榮えたものである。大きな町に住んでゐる人の都會生活は、田園の景色の中に新しい清涼劑を要求するやうになつた。ヴェルハアレンの「觸手ある都會」にある如く、都會はその生活の苦しみに堪へかねて、周圍の田園を侵略する。侵略しないまでも、その中に自分を見出したいと藻掻く。テオクリツスはシシリヤの羊飼に歌はれた原始的な調を、教育ある讀者の趣味に適ふやうに改作した。これ等の詩の題材は、土人の民話から取つて來られた。かくしてテオクリツスの作品は純藝術の領域にまでは入ることが出來た。然しその感覺は凡べて希臘古詩人の殘滓

にすぎない。彼はキオスやシシリヤやアレキサンドリヤにも住んだことがある。沙漠のやうなこの時代に於ては彼は特色ある作家であつたと言はなければならぬ。テオクリツス模倣者であるピオンとモスクスとは詩の技巧がない譯ではないけれど、詩人に最も重要な愛と空想とを持つてゐなかつた。

## マイム(Mime)

マイムは材料から見れば下層階級の生活を寫した戯曲的なヌケツチであり、方法から言へば一人の俳優によつて演ぜられた道化芝居である。その作風を創めたヘロダス(B.C.三〇〇—二五〇?)は、全くの寫實主義リアリスムであつた。彼の韻律法(特にスカゾンと言ふ)は粗笨で、在來の意味では非詩的である。彼は極端な不徳をも慘事をも遠慮なく描いた。然しその作品には非常に生氣があり、少くとも血が通つてゐる。現代のやうに行き詰つた詩壇では、反つて未來派や、ダダイズムの詩が喜ばれる傾向があるけれど、未來派やダダの詩も決して新しいものでな

い。と言ふのは、既にこのマイムなどの手法によつて二千年以前に開拓されてゐる。これ等の作品には今後の生命がある。

ヘロダスの作品は今日七篇だけ残存してゐるが、その第五篇には奴隸を愛してゐる女の變態性慾について、面白い記述を傳へてゐる。

## 童話

童話作者として多くの人を上げる必要はない。その代表者としてたゞ一人の名を上げるならば、イソップと言ふ名前で書いた人の童話を韻文に改作したバプリアス（紀元後一二世紀頃の人）がある。イソップ（紀元前六世紀頃の人）に就いては正確な事は知られてゐないが、多少神話的な人物である。その童話（その裏には教訓的意味を寓してあるので、普通に寓話と言ふけれど、童幼の文學は、必ず何等かの形式で、カルチュア即ち教育を伴つてゐないものはないものはないので、別に之を區別する必要を認めない。）は大部分傳説を主としたものである。バ

プリアスは作家として功績がないではなかつた。彼の作品は今後學校の教科書として久しく使用されてゐた。

## 短詩

短詩は四行かまたは二行位の完全な詩である。主として頌徳とか哀悼の意味で像や墓に刻みこまれたものであるが、後には道德的とか、抒情的な感情を、短い警句に歌ふときに使はれるやうになつた。これはビザンチン時代（猶太文化）の勢力の下に開拓せられたものである。我國の俳句のやうに文學としては最も入り易いために、萬人の嗜好に適したからであらう。然し希臘の最も優秀な短詩に於ては、文學的に高い價值をもつてゐる。テオクリトスやカリマス、エトリアのアレキサンダア及びタレントムのレオニダス（共に紀元前三世紀頃）が初期の優れた短詩作家であつた。

メレアゲル（紀元前六十年頃）は、彼自身の詩を澤山加へて短詩集を作つた。

彼は戀愛詩人であり、またシリアの生れであるがために東洋風の異國趣味と、詩の情熱とを持つてゐた。

羅馬時代になつてからは、フィリッブス（後一世紀）や戀愛詩人サルデイアのストラト（ハドリア皇帝の時代）が有名である。文法家のバラダス（後五世紀）やアガチアス（紀元後五五〇年頃）も亦短詩を書いた。アガチアスの短詩集はマキシムス・ブラヌデス（後十四世紀）の「アントロギヤフラチナ詞華集」に大部分収載せられて、我々にまで傳はつてゐる。

## 抒情詩

この時代に流行した抒情詩は、アナクレオンの詩風を模倣して、詩を遊戲にまで墮落させたところの所謂アナクレオンテアである。その作品は何等の情熱も力もなく、古い感覺の蒸し返しにすぎなかつた。自分の戀心が指導力とはならず、教師の教へた詩の方則が、感動の動機となつてゐる。然し讀むには平易である。

安價な好意をも受けるにたりる。また翻譯もし易い。然しそれは詩でないだけだ。ちようど雨の下を歩く一團の蒼白い兵士の歌が、歌でないやうに。淡い感激をふり立てて、主婦の弾くオルガンに合わせて歌ふ無智な學生の讚美歌が、歌ではないやうに。

## アレキサンドリンと教訓詩

マケドニヤの王安チゴヌス・ゴナタスの宮庭に住んでゐたソリのアラツス（B・C二七六年頃）は、ホメロスの六ヘクサメテラ脚韻フエソナにならつて、「現象」と言ふ天文学の著作をした。それは兎に角詩の領域には入るだけの形式と内容とをもつてゐる。羅馬のキテロがこれを翻譯した。

カリマクスはアテネで勉強した後アレキサンドリヤに表れ、プトレミイ・フィラデルフス（B・C二八五—二四七）の下に於て、圖書館の係りとなつた。彼の著作はすこぶる諸方面に亘り、八百冊に及んでゐたと言はてゐるが、現在残つてゐる



ものは極めて僅である。神話の起源を取り扱つた最も長い詩は散決し、最も有名な「ベレニスの岩」はカツルスのラテン譯によつて僅かに残つてゐるだけである。

ブトレミイ・エビハネス（B・C二〇五—一八一）の下に居てアレキサンドリヤの圖書館に務めたアポロニウス・ロオデイウスは、多くの學者的な詩を作つたのであるが、そのうち「アルゴナウチカ」は現存してゐる。

紀元後第四世紀と五世紀とは、涸々たるキリスト教思想に反抗して、希臘末流文學が最後の努力を試みた時代である。我々はかくて異教文化の最後の火花を、涙とともに眺めなければならぬ。

紀元後五世紀頃生きてゐたパンノボリスのノンヌスは、デイオニソスの神話に關して四十八冊の詩を書いた。彼の詩は初期のアレキサンドリン（十二句綴の詩主としてアレキサンダア大王の武勇を讚美した詩が多いためこの名がある。）に

似て、詩的價値の高い作品である。その詩の中に次のやうな、未來派を思はせるところの文句がある。

キタロンの山は泣く。デイオニソスは彼の母の子宮の中にて踊る。そしてア

トラスはかの大空を、彼の肩の上でまはす。

彼の弟子ムサエウスはレアンデルとヘロの傳説を材料として、三百四十行の叙事詩を書いた。これは「いろ榎せゆく希臘詩壇に咲きし残んの薔薇」と言はれてゐる。彼等は二人とも基督教に降伏して、善良なるクリスチアンとなつたのは、時勢とは言へ、誠に残念なことであつた。

### 散文

小スキピオの友人であつたポリビウスは、第一ポエニ戦争から、紀元前百四十四年に到るまでの歴史を四十冊の書物に書いた。材料の取り扱ひ方はツキヂデスに似てゐるけれども、文章は彼と比べて非常に劣つてゐると言はれる。ケエザル

の「ガリヤ戦争記」に到るまでの歴史を書いたディオドルス・シクルス（B・C 四十年頃）や、地中海沿岸に位置する諸國の「地理」を書いたストラボ（B・C 五四—A・D 二四？）や、「希臘記」によつて考古學的材料を供給したパウサニアス（後二世紀）及び「アレキサンダー大王のアナバシス」を書いたアリアン（A・D 九五—一七五？）は、この時代の散文作家として、忘れられない人々である。

最も通俗な作家は「プルタルク英雄傳」によつて有名なカエロナエアのプルタルク（A・D 五〇年頃生る）である。彼は歴史家ではない。逸話と行迹とを書き集めた傳記作者にすぎないけれども、廣い趣味の持主であつた。

文學の範圍に於ては最も注意すべき二つの論文がこの時代に屬する。一つはアリストテレスの「修辭學」を根據として散文の技術を論じたデメトリウスの「文體論」と、ロンギウス（A・D 七三年死）の作と稱せらるる「崇高論」とである。こ

の二篇の文藝批評論は、希臘類廢期の他の凡ての作品と必適する程の價值をもつてゐるものである。

最後に尙一人の、この時代に屬する恐らく最大のギリシヤ作家の一人に就いて述べねばならない。即ちモサタのルシアン（A・D 一二五—二〇〇）である。彼は貧困のうちに生れ、長じては放浪の修辭學者として、寺小屋のお師匠様のやうな生活をしてゐた。然し彼は哲學をも深く研究し、文學の形式としての對話を復活させた。彼の文章は純粹である。優雅であり、流暢である。凡ての修辭法の囚となることから超然として、それ自身の領域を作つてゐる。

希臘文學はかくの如くにして終つた。ヘラクライトスの言葉を眞似て、凡ては流れたり！と、叫ばなければならぬ。

流れ去つた時代の中へ、我々は二度立たうとは言はない。たゞより新しきもの

を創造するために、また世界に散在する多くの藝術と文化の中に通つてゐる希臘の影響をよりよく理解するために、希臘よと我々はこゝに呼びかけたのである。

(完)

ビブリオグラフィ  
書誌

文學の起源を研究するには、どうしても西歐諸國の學問に弟子入りしなければならぬ。然し著名な書物であつて、既に譯の出てるものもあるから、それ等によつて一般的な概念を掴むことは出来るであらう。ホルンの「文學の起源」は稍々舊説に屬してゐるので、最近の心理學的な研究法から見れば、あまり價値のあるものではないけれども、多くの材料を提供してゐるので、一度は通讀する必要がある、これには本間久雄氏の譯や、安藤弘氏の譯が出てゐる。モオルトンの文學論も一部分の抄譯が出てゐる。これも何かの参考にはなるだらう。題して「文學形態論」と言つてゐる。日本文學の創生期を研究するには、著者は自信をもつて武田祐吉氏の二名著「上代國文學の研究」及び「神と神を祭る者との文學」を推稱しなければならぬ。その他植松安氏の「記紀の歌の新釋」や津田左右吉氏の「記紀の新研究」なども参考すべきである。また日本文學を新しい見地から見たものに

は、土居光知氏の文學序説中の論文「日本文學の展開」や、和辻哲郎氏の「日本古代文化」などがある。

希臘文學の研究は、現在の日本に於ては全く「未知の土地」である。最近になつて希臘劇の譯なども出てゐるけれど、明治二十年代に、ロシヤ語の讀めざるロシヤ文學者や、フランス語の讀めざるフランス文學者が跳梁してゐた時代の文學研究の程度と、著しい相異がないやうに思はれる。

然し中には注意すべき著作がない譯ではない。希臘史の一般的知識のためには坂口昂氏の「世界に於ける希臘文明の潮流」があるし、少し古いものには山原三郎氏の「古代希臘の思想及び文藝」が参考書となるであらう。最近に「希臘思潮講話」といふやうな本も出てゐる。翻譯ではブツチャの「希臘天才の諸相」も田中秀央氏の名譯となつてゐる。

ホメロスの譯には一二種の譯があるが、小さな抄譯物に「ホーム物語」と言ふものも出でゐる。「イリアッド」は古く馬場孤蝶氏の譯があり「オディッセイ」は生田長江氏が譯してゐる。抒情詩の一部分は竹友藻風氏の「希臘詞花集」に收められてゐる。散文の翻譯は

まだ見あたらぬ。希臘悲劇に關する研究では、新關良三氏の「希臘悲劇論」(岩波版)を推さなければならぬ。中村吉藏氏の「希臘悲劇六曲」は、オックスフォードの希臘文學者ギルバルト・マレエの譯を底本としてゐるらしいが、よく日本語に移されてゐる。古典劇大系の第一第二を占むる村松正俊氏の譯には、アリストファネスの喜劇も加へられてゐて、有用な本である。哲學者は比較的多く紹介されてゐる。「ソクラテス論語」と言つて、クセノホンの「メモラビリヤ」を譯したものがあつた。ウインデルバンドの名著「プラトン」も出隆氏の譯が出た。プラトン自身の著書も、「ソクラテスの辯明」や、「クリトン」を始め二三の譯が出てゐる。少し前、生田春月氏がセリイの英譯によつて「饗宴篇」を譯した。アリストテレスの「詩學」も松浦嘉一氏の立派な譯が出来た。希臘頽廢期の文學は何も譯されてゐないであらう。譯すほど重要な作品もない。

希臘文學を、希臘原文から研究する以外に、その手引として英獨の先輩によつて開拓せられた功績を無視してはならない。希臘の研究は他の學問と同じく日進月歩の觀があるの

で、昨日の定説必ずしも今日には信ぜられなくなる。色いろな點から研究のし易い、また

多くの功績を残しつつある英獨の學說に注意を拂はなければならぬ。それ等の歴史的な文獻に就ては他日企てやうと思ふ「希臘劇とその舞臺構造」の中に悉したいと考へてゐる。希臘語を研究するには英語の讀める方は W. Goodwin の Greek Grammar を讀みたい。恐らく英語で書かれた最良の希臘文法書であらう。これには、初學者に必要な「練習」がないので、White を言ふ人がこれに附屬すべき練習の部を書いてゐる。First Greek Lesson を言ふ。White 自身の文法書もあり Allen のもあるけれど、Goodwin のものが最高の位置を占める。佛語で書かれた文法書は E. Ragon の Grammaire Gréque があるが、これも練習の部を缺いてゐるので、やはり同じ著者によつてその部分だけの本が出来てゐる。獨逸語で書かれた文法書は非常に多いが、普通の學校で用ひられてゐる文法書は、Griechische Schulgrammatik である。少し程度の高いものには、Bellermann の Griechische Grammatik がある。これは二部から成つてゐて、一部は文法、二部は讀本になつてゐる。一部にはホメロスの文法も附いてゐるので、ホメロスを読むには是非参考しなければならぬ。

大正十四年七月十日印刷  
大正十四年七月十五日發行

文學の創生期

定價八拾錢

著者 麻生 義

發行者 中川 徳太郎

印刷者 高橋 丹治

東京市本郷區田町四〇番地

東京市牛込區區廳前四三六番地

北斗社印刷所

イリラブイラ・トツケホ  
【1】

發行所 東京市本郷區 田町四十番地 至上社

發賣所 東京市神田區 錦町一ノ九 度文堂

振替東京六七八八二番

# ポケット・ライブラリー 近刊豫告

- 【2】 小山勝清著 農村問題原理
- 【3】 小牧近江著 無産階級藝術の本質
- 【4】 沖野岩三郎著 宗教の利用と迫害
- 【5】 井上勇著 近代佛蘭西文學思潮
- 【6】 橋本憲三著 文學新語選
- 【7】 玉生謙太郎著 近代科學概論
- 【8】 川邊文治著 古典教育學
- 【9】 麻生義著 藝術學
- 【10】 三浦藤著作 日本古代文化

すらよれこもしず必は序順の行發 [刊續下以]

錢四册各料送 錢拾八册各價定 製上判截半菊

ロマンス・ローラン作 布施延雄譯 鷹野路夫裝幀

## ア・ニネットとシルゼイ

忽四版 四六判上製  
四頁 四角  
送料 五拾錢  
十二錢

この一篇は、世界文壇の巨星ローランが目下企ててゐる長篇「魅せられたるたましひ」の序曲をなすものである。嘗て「ジャン・クリストフ」によるたゞ、一音楽家の力強き生涯を描いたローランは、本書に於ては、聰明なる頭脳と、純真なる感情と、豊かな人間性とを完全に備へたアンネットといふ新しい女性を創造し、配するに異母妹にあたる、自由戀愛の讚美者シルゼイを以てし、如何に彼女が詐りなき生活によつて、薄明の未來の野に光りと希望とに満ちた女性自らの道を見出ださんとて努力してゐるか云ふことを、溢るゝ情熱とほどばしる力とを以て我々に物語つてゐる。ローランが舊作「ジャン・クリストフ」以上の大作たらしむべく、畢生の努力を傾注しつたものである。

シャルル・ルイ・フィリップ作 井上勇譯

## 貧と母と子

「フィリップ傑作集」第一卷

七月中旬刊行す

近代佛蘭西作家中最も特色あるフィリップの代表作也

ハミルトン著 古川義治譯	演劇原論	四六判上製 定價壹圓七拾錢 送料十二錢
ブラット女史著 古川義治譯	作劇法講話	四六判上製 定價壹圓四錢 送料四錢
チエスタアトン著 武邨達雄譯	バアナアド・シヨウ	四六判上製 定價貳圓貳拾錢 送料十二錢
ブルツク著 太田鎖九一譯	概觀 英吉利文學史	四六判上製 定價貳圓四拾錢 送料十二錢
ペアリング著 坂間昇譯	概觀 露西亞文學史	四六判上製 定價壹圓八拾錢 送料十二錢
ブラウン著 京口元吉譯	歷史哲學概論	四六判上製 定價壹圓參拾錢 送料十二錢

516  
335



終

